

500  
3

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9 10 1 2 3 4

始



500-3



の  
回  
教





祭日十の徒教回リドバ

## 序

本書は余が大正十年初夏、某所に於て試みたる南洋の回教に関する講演筆録を補訂したもので、大體、第一段に於て南洋流布の歴史を述べ、南洋住民の性情を述べつゝ回教が如何なる状態にあるか、且つは彼等回教徒を統治する各植民地政府が如何なる態度政策を以て回教徒に臨めるかを説論し、第二段に於ては主として回教教義を略説しつゝ、それが如何に信奉され實踐されて居るかを觀察し、第三段に於て回教儀律の略述を緯として横に南洋回教の實相を評論しつゝ、一般的に神聖戦争を問題とする論評に及べるものである。

態裁は依然、講演のまゝで殊更に章節を劃して著述の態裁に改めず

いた。之は或は讀者諸君を不便するものかとも慮らぬては無かつたが、もと本書は南洋に於ける回教の諸相を單に説明的に述べる以上に、余が所感なり論評なりが隨所に縦横して居るので、よし章節を劃するにしても到底完全になし得ないものと思はれるし、且つは本書の通讀を願求するものから、旁々以て殊更に之れを爲さなかつたのである。尤も讀者諸君が不味なる本書の通讀に感ぜらるゝ不愉快さを慮つた爲め、主要項目丈けは別行に抽き離して恰も章節の標題なるかの如く態裁しては置いた。て、夫れ等は皆本文中に連續さるべきものであるから、落さず讀みつゞかれんことを願はしむ。

従つて本書の内容目次も、目次と云ふより寧ろ摘要と稱すべきを當れりとするやうなものになつて居る。が、之れは反つて讀者諸君を便利するも

のであるかとも思はれる。如何のものか。

兎に角に本書の如きものでも、讀者諸君に南洋に於ける回教に關して、何分の理解を得て貰へる料となり得るならば、余の喜びは無上である。

余が大正六年の拙著『回教』は教義、教相、教派、教史、教勢等に涉つて大體を一般的に述べたものであるが、併せ讀まれんことは又た余の希望する所である。

大正十年十二月四日、淡路假屋の浦は西風に海碧く風ぎ、行き交ふ眞帆片帆に午後の日射し美し。

著 者 識

目次

第一段……………(一)

回教は猶太教基督教と等しくヤーベ信仰に基脚するものである……  
「經典と劍」と云ふ回教特異なる布教手段は開教後三百年ならずして彼のサラセンの大發展をなした……明確に國家を意識せなかつたことは回教々團衰微の原因である……世界人口十六億四千六百餘萬の中回教徒は二億二千二百萬で世界第一の大宗教である……

南洋回教徒の概數……………(七)

南洋の人口四千九百七十四萬として七割三分即ち三千八百九十五萬は回教徒である……

× 回教の南洋流布……………(九)

十三世紀の中葉スマトラの北部及び南部兩地方各別に流布したのが  
濫觴らしい……………十四世紀の中葉新嘉坡王國の創始は回教をスマトラ  
南部地方より馬來半島に傳へた……………十五世紀初葉新嘉坡王國の潰滅  
は回教を馬來半島東岸諸地方及びボルネオ西部地方に傳播した……………  
…馬來半島西岸諸地方は十六世紀中葉バサイ王國の植民によつて傳  
播した……………十四世紀末葉アラビヤ人爪哇に傳へ印度教と對抗しつゝ、  
神聖戰爭に訴へて十六世紀に入つて爪哇全土に流布した……………ハルマ  
ヘラ、セレベス、ボルネオ東南部、スンダ諸島の流布は十五世紀末  
葉より十七世紀初葉に涉る……………スールー、ミンダナオの流布は十五

× マレー人の民族性……………(二四)

世紀末葉であらう……………

好奇心の強さと樂天的なるは通有性の顯著なるものである……………南  
洋の風土は住民をして浪漫的移動性を強からしめ且つ容易ならしめ  
る……………彼等の強き好奇心は容易に回教徒たらしめた……………彼等の樂天  
的なるは煩瑣なる回教儀律を遊戯化し新舊信仰の圓融妥協に成功し  
た……………彼等は回教々義に無理解である……………

南洋に於ける回教の現状……………(三六)

精神的にも外形的にも政治的にも我が徳川時代に於ける佛教に酷似  
して居る……………彼等は信仰把持に氣紛れてあり儀律實踐に遊戯的であ

る概評して異端的回教徒と謂ふべし……スマトラのパドリ回教徒は例外で典型的回教徒と謂ふべし……宗派的にはシャム派に屬すべきか……パドリ回教徒の十日祭は面白し……

植民地政府の對回教徒政策……(五〇)

菲律賓政府は放任を主義とする半軍政下に特種扱ひして居る……蘭領東印度政府は陽に放任陰に抑壓を事として居る……英國植民地政府は無干渉主義の下に懐柔を事とする……回教布教運動の抑止と基督教改宗の奨励とは三者軌を一つにする……

回教徒の改宗……(五九)

基督教改宗は絶對的に不可能なるものゝ如し……改宗の罪惡觀と神

の選民たるの矜持と救世主出現の確信とは如何なる宗教に改宗せしむるとも至難事である……基督教とは教義教相共に相容れず歴史的感情も融和し難い……

第一一段……(六九)

回教成立の要素……(七〇)

天神アラハの實在と人間生命の不滅を信ずる一種の宿命説を哲理として人間相互の親和福祉増進を目的とする……教義の本來は世界的で回教社會のみを祝福せんとする如き偏狭なるものではない……人間相互の親和福祉増進は五箇信條の嚴修と回教儀律の實踐によつて實現されるものとする……



天神アラ一の信仰……………(七五)

神の屬性の峻嚴なる一面のみが極説され過ぎる……………經典コーランを  
尊重し過ぎる……………南洋回教徒は一般に經典に無理解であり教祖を意  
識せない者も少くない……………土耳其皇帝はカリフとして一般回教徒尊  
信の中心であるが理論的にはラムを尊信する一派がありシャイ派教  
徒の如きは名實共にシャリフを尊信せんとする……………尊信すべき教皇  
の不一致は教團々結上の一大障礙である……………土耳其皇帝とラムとシ  
ヤリフと孰れが眞に尊信さるべき教皇なるか……………スンニ派回教徒は  
教祖言行録を經典と等しく尊崇する……………

清淨及び汚穢に關する觀念……………(九八)

一切萬物を本質的に淨穢二物に確分する……………人は本來清淨物なれど  
時間的に汚穢となる……………汚穢化に二あり淨化法にも亦た二種ある……………  
…行爲の一切は心身清淨なるべきを根本要件とする……………

X 祈禱禮拜……………(一〇三)

少くも一日五回一定の基本條件と順序と時間を確守してせねばなら  
ぬ……………金曜日の正午は最も莊嚴に祈禱禮拜する……………何の爲めに祈禱  
するか理論と實際に甚だしき違ひがある……………男尊女卑は本質的なる  
かの如くに説示されてるが母系主義的に發達した南洋人の家庭では  
必ずしも然らず……………加持祈禱魔法禁厭は教義に悖るものであるが南  
洋では盛んである……………

回曆第九月三十日間の齋食……………(一四)

齋食の修行は甚だ至難なるが如くて實際は案外なものである……………南洋回教徒の齋食修行は百害ありて一利なし……………他の月の任意の齋食は望まじきとか……………

Xメツカ巡禮……………(一九)

全國教徒の等しく最重要視するもので南洋回教徒は別の意味から殊更に重要視する……………回教徒の精神的鼓舞であり團結を強固にする上に効果がある……………南洋植民地政府にとつては數害あつて一利だもない重大問題である……………蘭領東印度は之れによつて年々五百萬盾の正貨と八十萬人工の勞力を失ひつゝある……………

喜捨……………(一三)

回教の國財政策の過誤はこの信條を有名無實のものとして仕舞つた……………

第三段……………(一三八)

回教儀律は回教法規の原據で經典に原則するものである……………經典解釋の權威に四大家があるが南洋のはシャフキのに則る所が多い……………

遵守すべき儀律……………(一四一)

五箇信條の敬虔なる勤行……………偶像迷信の排斥……………偶像排斥は南洋人の型像藝術の嚴達を阻礙した……………豚肉その他の飲食に關するものは割合に嚴守されてゐる……………射伴的遊戯も禁止される……………

家族生活と儀律……………(一四八)

神意による夫婦關係の成立を以て家庭生活は開始する……………近親結婚及び異教徒との結婚は嚴禁せらる……………南洋婦女子は絶對的に異教徒男子と結婚せない……………一夫四妻及び蓄妾の寛認は教祖の理想に反する……………離婚及び再婚に關して周密な儀律はあるが南洋では大して重要なものではない……………離婚は生理的にも精神的にも未婚の舊態に復するとの主義は南洋では彼等の結婚生活を紊亂した……………家督及び遺産相續に關する儀律……………

社會生活に關する儀律……………(一五九)

凡て儀律は教徒の人格的平等無差別を主義とする……………奴隸は嚴禁

教團生活に關する儀律……………(一七四)

されてゐるが實質的に奴隸であるものはある、之れは自由契約による正常なるものと做される……………正常なる契約の誤つた解釋は彼等の社會生活を紊亂する……………姦通賣淫陰姦等に關する嚴格な儀律も一般に性慾生活に放縱な南洋人には權威がない……………治罪法は賠償即刑罪を主義とする……………植民政府は彼等の民事上のことに回教儀律を尊重するが刑事上は無視する……………回教法規は行爲に對する責任能力を二つに區別する……………回教徒の異教徒觀は必ずしも排他的偏狹なものではない……………南洋回教徒は毫も宗教的感情によつて異教徒と交渉せない……………彼等は英人蘭人を敬遠し支邦人アラビヤ人を嫌遠し印度人を輕蔑し日本人獨逸人に親近せんとする……………

割禮は重要なるものではないが南洋回教徒は重要なるものとする……  
 神聖戦争は回教特異なる布教及び護法手段であるが決して軍國的侵略を意味するものではない……回教は明確なる國家觀念を缺く……  
 布教を目的とする神聖戦争は今容易にあり得ないが護法を目的とするものは容易に起り得る……神聖戦争の起否如何は「回教の地」の解釋如何による……各植民地政府の回教徒放任主義は護法神聖戦争防止に功があるが絶對的のものではない……汎回教主義は抽象的な「回教の地」を政治的に解釋して全回教徒の一大帝國の劍鞘を目的とする……今次大戦亂の結果土耳其帝國の勢力の潰頽は汎回教運動を危険化した……南洋にも汎回教主義は徐々に浸潤しつつある……  
 ……要するに南洋の回教徒は未だ異端的である……



# 南洋の回教

瀬川 龜 著



## 第一段

回教は猶太教基督教と著しくヤーベ信仰に基脚するものである……「經典と經」と云ふ回教特異なる布教手段は開教後三百年ならずして彼のサラセンの大發展をなした……  
 ……開教の歴史を意圖せなかつたことは回教々國衰微の原因である……世界人口十六億四千六百餘萬の中回教徒は二億二千二百萬で世界第一の大宗教である……

回教即ちイスラームは西紀六百十一年アラビヤの都市メッカの主長コレイブン・ユサフの族、マホメットがヒラ山嶺の洞窟に於て鎮魂觀念の結果、唯一天神の啓示を得たと稱して開教したもので、其の教義は古來セム民族の間に起つたヤーベ神の信仰を基礎とし、當時困迷し切つて居つたアラビヤ

の世態人情を改革し淨化せんことを目的としたものである。而して彼れマホメットが苟も新宗教の開祖としての精神的理想即ち大慈悲の心と、社會改革の道德家として機械觀的理想即ち世態改善の願念の熾烈なる宣揚は、古今東西凡べての宗教家將た改革者が一樣に經驗する壓迫と迫害に會ふて而も夫れ等の壓迫と迫害の執拗にして兇猛なるに及んで、遂に神の福音を宣布すべき慈悲忍辱の宗教者として一般には忌彈さるべき兵戈を破邪膺懲の手段に訴へ、屍山血河の間に新宗教の教線を擴むることを敢てしたことは後代々の繼承者をして所謂「經典と劍と」の特異なる標語の下に回教獨特の布教手段に精進勇猛ならしめ、其の結果は十世紀の初葉即ちマホメット開教の後三百年ならずして彼のサラセンの名の下にその教線はアラビヤを中心として東してペルシヤ、インダス河原に伸び西してはエヂプト、

スーダン、トリポリ、チュニス、アルゼリア、モロッコに渉る地中海南岸一帯の地に敷き、更にジブラルタル海峡を渡つてスペインの地にまで擴張された大教團を現出し、其の文化の人類文明に寄與する所はカイロを中心として實にギリシヤ、ローマの文明と對峙し人類文明史の一大新時代を鮮明に劃するに到つたのであつた。今日、我々が日常使用する算用數字の即ちサラセン文化の寄與なるを思ひ、ケミストリー、アルマナツク、アルゼブラー、アルケミー、アルコール等の語の孰れもアラビヤ語源の語なることを思はゞ、化學、曆學、代數學、煉金術等の科學的文明の孰れも之れサラセン文化に育まれて今日の發達をなしたるものなるを覺らしめられるのである。又た彼の世界最古の大學にしてバリ、ヅキン、モスコイの三大學と共に世界の大大學とせらるゝカイロのアヅハル大學の如は實に西紀九

百八十八年の創立にかゝる當時サラセン文化の結晶であり、今日尙スペインの地に残されたるアルハムブラの大寺院はサラセンの立體藝術の優秀を語る雄辯なる遺物である。之等は又た以て當時サラセンの勢威が政治的に物質的に科學的に又た精神的に如何に強盛なりしかを證するものである。

遮莫、回教には本來明確なる國家意識がなかつたことは漸時にしてサラセン教團の政治的分裂を來たし、政治的分裂は分裂箇々體の勢力を弱め、關つては物質的文明の進歩に後るゝを餘儀なくし、且つその教義そのものが既に餘りに儀律の末節にのみ拘泥して高等なる宗教心意の發達を阻礙した等の諸原因は相因果して、さしも盛大なりしサラセンの盛時を空しく一千年の過去の夢と葬り去つて仕舞つて、今日、一般的には回教は既に血なき過去の宗教たるに止まるかの如き感をなさしめ、従つて回教徒とし聞け

ば今日文明の第三流將た第四流の位置に沈溺せるかの状態にまで衰微せしめ終つて居るのである。然しながら、回教今日の衰態を以て直ちに過去のものとして葬り去らんとするは妄斷であり、回教徒を目して無爲な事なき者と斷じ去らんとするは危険である。試みに千九百二十年版のウキカー年鑑を採つて世界人口を見れば、世界總人口十六億四千六百四十九萬一千の内、その回教徒たるものは實に二億二千八百八十二萬五千にして、之れを印度教徒の二億一千萬、基督新教徒の一億九千二百萬、佛教徒の一億三千八百三萬一千に對比すれば、その教徒の數を以て實に世界最大の宗教なりと云ひ得べき勢を示して居るのである。尤も、世界の人口そのもの已に不正確であり、宗教別人口の如きは尙ほ更に不正確なものであるが、此の數字の如きは比較的近似のものとして擧ぐるに足るものであると思はれるのであ

る。而して是等世界人口の約一割四分強に當る二億二千萬の回教徒がその近代的物質文明上の位置の如何は、少時、措いて問はずとするも、その教義を把持することの如何に敬虔に如何に熱烈なるかを思ふ時、加之、今日是等回教徒の國際關係上の分布を見て約九百萬の回教徒がベルシヤ皇帝の統治下にあり約一千六百萬が舊トルコ帝國の精神的統一の下にあり其の他モロツコ、アフガニスタン等に於て半獨立なる教團を組織せる外、大多數の回教徒は悉く英、佛、蘭、露、米、西、伊等の基督教國の統治下に將た支那、暹羅の佛教國の配下に屬せることを知るに及んでは、是等大多數の回教徒の安全なる統治上の研究、それに満足なる結論を齎らす爲めの回教々義及び回教徒氣質の研究は皆にその統治下に回教徒を有する國民のみならず、現に南洋諸地方に經濟的發展の方途を開いて回教徒と接觸するに到

れる我々日本國民の又た忽諸に附すべからざる必要事であると思はれるのである。自分が今日南洋に於ける回教の現勢に就て數年來些か注意して見聞し研究せし所を略叙せんとして比較的長談議の冒頭語をなした所以も、その用意する所は、南洋に於ける回教徒研究の今日我々にとりて重要事なりと思爲するが故である。

### 南洋回教徒の概數

南洋の人口四千九百七十四萬として七割三分即ち三千八百九十五萬は回教徒である

却説、南洋に於ける回教徒の現勢如何、素より不正確ながら比較的執るに足るべき統計に據つて南洋回教徒の概數を擧ぐれば今日我々が隱影の間に肯定せる南洋即ち菲律賓諸島馬來半島それから爪哇、ボルネオ、スマト

ラ、セレベス、モルツカ諸島、チモール列島等の所謂馬來群島に於ける總人口を約四千九百七十四萬ありと做して回教徒は蘭領東印度に三千六百萬、英領南洋に二百十萬、米領なるミンダナオに約五萬、合計三千八百九十五萬即ち全人口の七割三分に當る絶對多數を占めて、爾餘の二割七分もその大部分は菲律賓土人、ボルネオ山地の土人、東部爪哇テガル山地の土人、スマトラ中部地方のバタ人等の所謂原始多神教徒であり、基督教の如きは在住の歐米人等の基督教徒なるは無論なれども從來の南洋土人としては菲律賓人、ミナハサ人其他バタ人の一部分に教徒を有するに止り、印度教に至つては印度教徒の來住せる者を除いては僅かにバリ、ロムボクの二島土人間の一小部分に信仰され居るに過ぎないし、佛教徒に到つては少數なる日本人及び支那移住民を外にしては在來の南洋土人間には絶無と云つて憚ら

ぬ有様であるを知るに及んでは、回教は實に南洋の宗教であり、南洋の宗教は即ち回教なりと言ひ得る次第である。

### 回教の南洋流布

十三世紀の中葉スマトラの北部及び南部兩地方各別に流布したのが濫觴らしい……十四世紀の中葉新嘉坡王國の創始は回教をスマトラ南部地方より馬來半島に傳へた……十五世紀初葉新嘉坡王國の潰滅は回教を馬來半島東海岸諸地方及びボルネオ西部地方に傳播した……馬來半島西岸諸地方は十六世紀中葉バサイ王國の植民によつて傳播した……十四世紀末葉アラビヤ人爪哇に傳へ印度教と對抗しつゝ神聖戰爭に訴へて十六世紀に入つて爪哇全土に流布した……ハルマヘイラ、セレベス、ボルネオ東南部、スダン諸島の流布は十五世紀末葉より十七世紀初葉に涉る……スールー、ミンダナオの流布は十五世紀末葉であらう……

然らば今を去る一千三百年前アラビヤに起つた回教が前時如何なる過程をとつて今日斯く南洋の宗教となつたか、これは南洋回教の實勢を察し、南洋回教徒氣質を採ぬるに重要なる部分資料となるものである、所以を以て



回教の南洋流布の経過を略叙せねばならない。

嚴密な意味に於て南洋の歴史時代は十六世紀以後のことであつて夫れ以前は歴史的事實に於て甚だしく不明瞭であり、歴史的價値に於て亦た貧弱なるものである。アラビヤ商人の手記、或は諸蕃史等の支那の史籍によれば、十六世紀以前の南洋の状態を稍々考ふるに足る所もないではないが、之れとても七世紀以前に遡つては全然不明であるし、マレー人、爪哇人その他南洋土人間に傳へられた彼等の口碑傳説等は可なりに多くありはあるが是等はその談話なり叙述なりに随分思ひ切つた事實の荒唐無稽さと時代の大錯誤があつて俄かに以て歴史資料として採用し難いものがある。英佛の史家がマレー史資料の重要な一つとして取扱つた、マレー人の編年史即ちスジャラ、マラユの如きには此の荒唐無稽と時代錯誤とが充満しゐる

と云つた調子で、容易に信憑するに足らないのである。例へば同書の記述によるマレー人の祖スロン王の東方遠征の如きは事實としては當然五世紀の末葉或は六世紀の初葉であらねばならぬのに、その遠征して東方諸王を征服するや回教々義による城下の盟を結んで居ること等は未だ回教の本地即ちアラビヤに於ていさへ回教宣布以前の出來事として、一見してその記述の無稽なることが看破されて仕舞ふのである。要するに歐人の來航して交渉を生ずる迄の南洋の歴史は漠然として不明瞭である。従つて回教の何時如何にして南洋に宣布せられたかの事相も今日未だ詳かにすることは出來ないのであるが、少時、彼等の傳説に従ふならば、スマトラのアチーン人の記録は述べて曰く、其の昔、一人の英雄が忽然として海の彼方から渡來して土酋の姫を容れて妃となし、スリ、バヅカ、サルタン、ヤハーン、シ

ヤリと梵語とアラビヤ語と混淆した長つたらしい尊稱を號して君臨し、民に回教を宣布したとあつて、その所謂その昔とは大體に於て十三世紀の中葉と推定されるのである。彼のアラビヤ人イブンバッタがベルガル王の招聘に應じてモロッコを發しベンガルに渡航する途上、西紀一千三百四十五年にアチーン地方へ寄港し、此の地方既に回教の流布せるを見聞せし手記の事實等より推してアチーン地方への回教宣布は十三世紀中葉乃至十四世紀の初葉頃に初まつたものと略々推定することが出来る譯である。又た十四世紀の初葉メツカのシャリフは布教特使を此の地に喚派した事實はアラビヤ史籍に見ゆる所であつて、之れをアチーン或はバサイの記録に徴すれば、此の布教師は先づバスリに上陸して其の地方の土民を教化し、更に印度洋岸に沿ふてスマトラの西部地方を巡教し、漸次南下して遂にその南端を

廻つてスマトラ東部諸地方に布教し、マラツカ海峡岸を北上してアル、サムドラ地方に宣教する等、スマトラの回教宣布に異常な努力をした。その弟子なるサムドラ人マラ、シルはバルダ地方即ち今日のスマトラ東海岸州ランカット地方の布教に盡瘁し、バルダ王の歸信を得てその愛姫を賜つて王位を継ぎ、その生子マリ、ザビルは威を以て教を四隣に布き、遂にバサイ回教王國を創始した。これは略々西紀一千三百七十年頃のことらしく、このバサイ王國はその後約一世紀間マラツカ海峡を距て、マラツカ王國と文化の盛を競つたマレ、史上重要な位置を占むるものである。而してマラツカ王國も當時既に回教を以て國教とせるものであつたが、マラツカ人の回教歸依はバサイ人の夫れとは全々別な經過をとつてなされたものらしいのである。

彼のマルコボロの東方見聞記は種々な意味に於て東洋將た南洋の歴史を取扱ふ場合、必ず引證される所のものであるが、同書によれば西紀一千二百八十年の頃、彼れは小爪哇を訪問して其の地に既に回教の盛んなるを見聞して居る。而して彼の所謂小爪哇の地理的決定は今日尙ほ未だ確定されては居ないのであるが、略々スマトラの南部地方即ち今日のベンクレーン州邊であるらし、此の地方は支那史籍の所謂南海大食國に當る所であつて九世紀の中葉、早く既に此の地方は通商するアラビヤ商人によつて可成り強固なアラビヤの植民地が形成されて居たものと推されるのである。従つて、夫れ等アラビヤ商人は異教徒の回教々化を以て神に對する回教徒の嚴肅なる聖務なりと確信する回教徒たる以上、殊更に積極的な布教運動は無かつたとしても全々土民の回教々化を忽諸に附して居た譯でないことは

容易に首肯し得る所で、漸次にして回教はスマトラの南部諸地方に宣布され、彼のアチーン地方に南洋流布の第一歩を踏み占めたと殆んど同時代或はそれより以前既に回教はその南洋流布の根據をベンクレーン地方に占めて居たものと言ひ得るのである。而してこのベンクレーン地方に根據したる回教はスマトラの脊梁山脈を東に越えてバレンバン地方に流布し、バレンバン族の政治的發展に伴ふて十四世紀の中葉に及んではジャムビー、インダルギー地方にメナンカバウ回教王國なり、新嘉坡王國の現出によつて回教は馬來半島の南端地方に流布するに至つた譯である。後一世紀、新嘉坡王國は當時西部爪哇の地に盛大を誇つて居たバジャジャラン王國の侵寇に遇ふて抗爭數年、遂に西紀一千五百十年に滅亡したのであるが、その遺臣は各々集團して新しき地に新王國の再創を企て、回教は又た夫れ等

四散の新嘉坡マレー人に依つて新しき彼等の移住地に流布することになつた。即ち一つはマラッカ王國の建國によつて馬來半島の西岸地方に布き、一つはトレンガヌ王國の創設によつてケランタン、トレンガヌ、バハン即ち馬來半島東海岸の諸地方に流布し、又たブルネー及びスカダナに移流して今日の英領ボルネオ及び蘭領西ボルネオに流布することになつたのである。マラッカ王國の記録によれば、マラッカ王マハマッドが一夜或る不思議な夢兆によつて自發的に回教に歸依し、王國を擧げて回教に歸したと記してあるが之れは會々以て彼等の記録なるものゝ荒唐にして無稽なることを證すべき一端となるのみのものに過ぎないので、敢て此の記述を事實と認めてやるとすれば、夫はマラッカ王の回教信仰を強固にしたと云ふ一挿話たる位のもので、彼等マラッカ人はその以前既に回教徒であつたことは

疑ふべくもない所なのである。又たマラッカ以北の半島西海岸地方即ちネグリスピラン、セラングール、ペラ、ケダ、パリス等の諸地方は孰れも十六世紀の中葉に於てバサイ王國の政治的將た集團的移住植民の結果として回教の流布した次第で、斯くして馬來半島は十六世紀の中葉に及んで回教の地となつた譯である。

回教の爪哇流布は、スマトラ及び馬來半島のそれに較べて多少その趣きを異にしてゐる。と云ふのはスマトラ、馬來半島にあつてはその初めて回教に接した住民は、一般的には無宗教の徒とも云ふべき多くの怪力亂神を語る所謂原始的多神教の徒であつて未だその以前の過去に於て、進歩したる教義を有つ州等の宗教にも嘗て接したことはない人間であつたに對して、爪哇にあつては第三世紀の古きより通商將た植民行爲を不斷に續行し

て居たマラバル地方の印度人によつて小乗の佛教及び印度教が特別な區別なしに混淆雜然として傳へられてゐて、早く既に小乗佛教或は印度教の盛大なる地となつてゐたのであつたから、夫の回教の宣布されるに當つては當然の結果として布教に主動する人間は多少の迫害と壓迫は逃るゝ譯にゆかなかつた、従つて爪哇の回教布教師は孰れもこの迫害に抗し壓迫に耐へて盡瘁せなければならず、スマトラ、馬來半島のそれ等に比して非常の努力を必要としたのである。斯る環境はその極まる所、遂に爪哇史に有名なマンジャバヒの神聖戰爭となつて彼の『經典と劍と』の標語は南洋に於ては此處に初めて文字的に實行されねばならなかつた位に興趣の過程を辿つたのである。

爪哇人の記録に従へば、第十三世紀の末葉、西部爪哇に雄を稱せられし

バジャジャランの王子ブルワなる者が、當時、來航通商せしアラビヤ商人から回教々義の一端を聽いて大いに感ずる所よろしくあつて、決然メツカに到つて大いに回教々義の奥義を究めて歸來し大いに回教の宣布に銳意したのであつたが、王を首めとして一般人民の迫害を被つて山林に踏晦してその終る處を知らずとあつて爪哇回教流布の第一歩は不成功に中絶して仕舞つたのであつた。後、約百年にして教祖マホメツドの後裔なりと稱するアラビヤ人マウラナなる者が東部爪哇のグレシに來航して布教に努力し漸次、可成りの成果を收めて回教の爪哇流布の根を固め且つ多くの弟子を養成した。その弟子ラーマはマンジャバヒ王ウキジャヤの愛妃の甥なるの故を以て、王の公許と後援を得てアムベルに抜くべからざる回教々勢を布植し、大いにラ、ンバガン王國に教線を張つた。其の長子カリフワはマツ

ラ島に布教し、更にバリ、ロムボル及びチモール諸島に流布すべき根底を定め、次子ヌルは中部爪哇のチエリボンに宣教して更に大いに銳意して西部爪哇のバジャジャラン佛教國を改宗せしめんと努力しつゝ遂に能くその子ハサンをしてパンタムの宣布に成功せしめた。ラーマは今日爪哇回教徒の間に回教宣布の英雄として或は寧ろ神格者として尊崇されてゐるが、實にこれは尤もなとて爪哇の回教はラーマを以て興祖とすべきは當然である。ラーマの聖業はその愛婿バクに繼がれた。バク又たラーマを辱めざるの英俊であつて、その布教に銳意する所、遂に東部爪哇一圓の回教徒を統帥してマンジャバヒ王の峻烈なる壓迫に對抗し、神聖戰爭の手段に訴へて回教國デマ王朝の創規に絶大の援助を與へ、後年デマ王朝の勢威の下に急速な回教の爪哇流布の基を成した。今日爪哇の回教徒はバクの傳記を幾多の

神秘的事象を以て彩つて尊崇すると興祖に過ぎたるものがある。

西紀一千四百七十八年、爪哇史上否な南洋史上最大の王國マンジャバヒツの潰滅はその信奉する佛教の衰滅を意味し、新王朝デマの興隆は即ち回教々勢の擴大隆盛を表示するもので一方彼のハサンの西部爪哇布教と相呼應して十六世紀に入つて遂に舊來の佛教を一掃し全爪哇を擧げて回教流布の地となしたのである。

かく爪哇に流布した回教は會々グレンに來遊せりしたルナの土會によつてハルモヘラ諸島に傳へられ、更に一千五百八十年の頃にはマカツサルに宣布されてセレベスに教勢を張るべき基をなした。又た一方、十六世紀の初葉に於てデマ王朝の政治的交渉の下にパンジャルマシンに宣布され次いでボルネオの東岸なるサマリ نداに傳へられた。

タルナ、チドルを中心とするモルツカ諸島の回教は當時スペイン人の來航せるあつてその將來せるエスイット基督教との勢力の角逐に時に或は衰滅の徴を表はした事もあつたが、一千六百五年、和蘭の勢力の初めてチドルに扶殖されてより漸次にしてホルトガル、スペインの兩勢力は驅逐せられ、エスイット宣教師また多くは其の信徒を導いて菲律賓に退いたので回教は期せずして有利なる狀勢の下に容易にモルツカ諸島に流布するに至つた。

スールー、ミンダナオ二島への流布はその時代と経過と共に全々不明瞭であるが、西紀一千五百二十一年、スペイン人の手記する所によれば、當時これ等二島に回教の信奉されてゐたことを察し得るので、少くも十六世紀以前の何時か何人が回教徒の冒險的商人の通商によつて傳播されたものと

察せられるのである。

以上は回教の南洋廣布史の概略であるが、要する所、南洋に於ける回教の宣布は第十三世紀の中葉以後に於てスマトラ北部のアチーン、同南部ベングローレン及び東部爪哇グレンの三地方を出發點として、爾來星霜三百年餘り、第十六世紀の末期に及んで廣袤一百万方哩に涉つて能く遂に南洋の宗教となり濟まし、而かもその宣布の内容の如きは特に注目するに價すべき組織的な教團の積極的企劃に出たものではなくして、その初め回教徒たる印度人將たアラビヤ人に接した土民が寧ろ自發的に回教の福音を求めたことに始つたもので、その流布は自然に圓滑に容易に進捗して行つたと云へるのである。尤も既に述べたが爪哇に於ては他の地方と多少趣きを異にして神聖戰爭の手段に訴へて流血の慘を犠牲にした事實はあるが、此事實

も仔細に觀察すると夫は『經典と劍と』を標語とする回教宣布精神の積極的發露ではなくて當時の事情已むを得ざる消極的手段に過ぎないものであつたことが領かれるのであつて、回教の南洋宣布は回教史の何れの頁にも見ざる平和的事相裡に展開されて來て居る次第で、之れを以て或は寧ろ奇蹟的であるとも言へば言ひ得る位に比較的短時日に又た比較的廣地域に涉つて斯く平和裡に流布した譯である。然らば斯く寧ろ奇蹟的な流布は如何なる理由によるか、之れ一應は説明せねばならない重要にして且つ興味深き問題である。

### マレー人の民族性

好奇心の強きと樂天的なるは通有性の顯著なるものである……南洋の風土は住民をして浪漫的移動性を強からしめ且つ容易ならしめる……彼等の強き好奇心は容易に回教徒ならしめた……彼等の樂天的なるは煩瑣なる回教儀律を遊戯化し新舊信仰の圓隔

妥協に成功した……彼等は回教々義に無理解である……

一體、スマトラの住民にしる馬來半島の土人にしる將た爪哇人にしるポルネオの人にしる概稱してアレー人の民族性とも云ふべきものに顯著なる二つの通有性があるやうである。それは好奇心の強いのと樂天的であると云ふこととであるが、之れが即ち彼等をして容易に回教を受け入れしめ、而して獨斷にして偏狹な回教々義を鵜呑みにせしめ、又窮屈なるまで煩瑣な回教儀律を案外事もなげに修行せしめた原因であると思はれるのである。

彼等の郷土即ち南洋は常に日と水との極大なる恩恵を擅にして、古來彼等の生活物資は殆んど何等云ふべき勢力を要せずして容易に且つ自由に彼等の欲するまゝに恵まれてあつた。斯く彼等は物質的に祝福されてあつた



X

が、彼等は必ずしも精神的には祝福されてゐたとは云ひ難いものであつた。即ち彼等の環境は所謂常夏の國土であつてその自然現象なり自然物象は極めて變化の乏しいものである、従つて彼等は外物によつて精神的に樂しましめられることは常に一狀不變であつて、彼等は殆んど具象されたる外物によつて樂しましめられることは絶無とも云ふべき環境に置かれてあつた。それで彼等は古來屢々彼等の居處を移すことによつて僅かに山容水姿の異なるを求め得てせめてもの慰樂を追ふて居たのであつた。尤も、他にも性慾の自由奔放なる開展の如き確かに彼等の悅樂の重要なる一つであつたに相違ないのであるが、夫れとて常に同一單純な環境裡にあつては、その悅樂の度も漸減されるのは自然の結果である。加之も、南洋の自然地理は彼等をして轉々屢次の移遷を容易ならしむる程に都合よく出來て居た

X

ので、彼等をして常習の移住者たらしめ彼等の好奇心を後天的に強からしめ來たのである。由來、民族の移遷に二つの原因があり、彼の遊牧の民が所謂水草を逐ふて轉々移遷するものものは全く生活物資の缺乏に起因する經濟的移遷の原因であつて、古來多くの民族の移遷は多く此經濟的原因によるものであつたらうが、南洋住民の移遷は全く經濟的強迫と沒交渉に浪漫的に移遷を常習してゐたもので、彼等は全く新奇を逐ふて常に屢々移遷を實行してゐたのである。斯る彼等が會々或る機會即ち回教を奉ずるアラビヤ人或は印度人の來航通商せる者と接觸して、漫然回教の宗教的作法に接し、將た何等かの記録を以てその教義の一端を簡明され歸依を勧誘するに至つた場合、彼等の斯く強度なる好奇心は如何に發作するか、その深くを究めず實情を詳にせずして先づ夫れ等が行ふ所を摸倣し、説く所を受

け入れ、勧誘するがまゝに歸依することは自明の理であらねばならない。彼のチドル會長の歸依、將たケダ王の改宗の傳記等は以て這般の消息を雄辯に語るものである。

タルナ會長が未だグレンシより回教を傳へぬ以前僅かの昔のことである。その對岸なるチドルの會長は通商上の要件を以て當時來航中のアラビヤ商人を引見した時のことである。商議は意外に長引いて日も暮れ方になつた。すると彼のアラビヤ商人は時正に商議の白熱點に高潮してゐたにも關らず、突如起立して會長の面に背いて奇異の處作宜しくあつて更に跪坐して更に奇異な處作を奇異なる論文につれて可成り長時間續行した。即ち商人はその信奉する回教儀律に遵ふて日暮時の祈禱禮拜を敬虔に且つ嚴肅に修行したのであつた。會長の好奇心は忽ちに發作し、乞ふて商人よりその作

法を習ひ、次いで回教々義を傳へられて回教に歸依し、以て會々グレンシに遊びて回教を傳へたるタルナ會長と相呼應して回教の宣布に努め、遂にモルツカ諸島を回教の地とするに至つたのである。

ケダ王改宗の説話は之れに較べると稍々心靈上の純潔さを缺くものであるが、王も亦た事を以て當時來航通商せるアラビヤ商人と會見した。王は當時四隣に比びなき猗頓の富者であつた。て、會商の要件の濟んだ後、王は自家の富を誇示すべく種々の財寶を處狭きまで列べ立て、心竊かにアラビヤ商人の驚嘆を豫期して居たのであつたが、結果は案外に、道が四隣無比の王の富も毫もアラビヤ商人を驚かすに足らなかつた。王は心憎く、思ふたが其の日はそのまゝ過ぎて或る日、王は親らアラビヤ商人を訪ねてその富を探り、曩の日の心憎さに復讐せんとしたのであつた。が、扱て當の

儲の富を知るに及んで、反對に王は相手の富の到底彼れ自身の富に比ぶべくもなく偉大なのに驚嘆して焦立つ心に斯く莫大の富をなした理由を尋ねた。アラビヤ商人は徐ろに答へて、王の富と我が富との斯くの多少懸隔は王の信ずるものと我の信ずる唯一天神アラハの優劣尊卑に由るものである、と説いて王の請ふがまゝに回教の教義を説き聞かせた。於茲、流石のケダ王も翻然として回教に歸せざるを得なかつたと云ふのである。

兎に角に、南洋の住民はその強烈な好奇心に驅られて深き思慮なしに容易に寧ろ一種の遊戯的氣分から回教に這入つた次第である。然しながら回教は古今東西に涉つてあらゆる宗教中最も嚴格なる外制教である。その外制的教儀律は阿含佛教の戒律を以ても尙ほ三舍を避くる的に細密であり煩雜である。之れは所詮、性來の樂天家て生活の一切を容易將た簡便を以て處

置し去らんとする彼等の耐え得べからざるもののであるが、之れも事實は案外無難に處理されて、彼等は夫れ等を生活餘裕者の一種の道樂として遵奉し修行することが出来た。然し夫れもその修行に容易にして彼等に都合のよい儀律のみに止めて都合の悪い儀律は不問に附して平氣であり、回教の布教師將た僧侶等も又た必ずしも彼等の氣紛れの樂天的性情に都合の悪い様な煩はしい儀律は勝手に取捨鹽梅して、その實行を強要せなかつたし、又た今日も強要して居ないのである。一體、回教は未だその唯一天神アラハを信奉せざる者即ち異教徒に對しては甚だしく偏狹て酷薄であるが、一度改宗して回教徒となるに於ては驚くべく寛大で親誼であるのが回教宣布の傳統的實相であるので、南洋に於ける斯く異端的所作も何等遲疑する所なく認容された譯である。

斯くて道に据屈煩瑣なる回教儀律も性來樂天的なる彼等マレー人にとりては容易に妥協せしめ了るとが出来たのであるが、その神觀或は宗教觀念の攝容は本來斯く簡單に處置されべきのものではない筈である。彼等とて比喩、原始的であり幼稚でありながらその祖先以來久しき歲月の間に醸成された神觀と宗教意識とは有つて居たことは事實であり、殊に爪哇人の如く既に小乗佛教なり印度教なりによつて宗教意識を確立し信仰を繼承して來て居る者にとつては、新しく招徠されたる宗教が比喩へ如何に深遠なる哲理に基脚して如何に崇高なる信仰を教ふるものであるにしても、それに改宗し、それを信仰し得るには必ずや耐え難き精神的苦悶に試練されねばならない筈である。然しこの問題も事實は要らぬ他人の頭痛鉢巻きて、依然として樂天的な氣紛れな、小六ヶ敷しいことを極度に嫌忌する彼等の

性情は容易に且つ巧妙に新舊思想の圓融的妥協に成功して、大多數の者は殆んど何等の精神的苦悶を経験せずに至極のん氣に回教の宗教的主張を攝容して仕舞つたのであつた。一例を擧ぐれば、トンヂーと云ふ神様はメナシカバウ土人の古來幾多數ある多神中の最高神格として人間の生命を司る神なりと信奉崇敬してゐたもので、唯一天神アラの外に一切の神の存在を否定する回教の神觀を攝容するに就てはトンヂー信仰の彼等にとつて之れは苦しき精神上の重大問題であつた。所詮、アラとトンヂー神とを同格の神として崇敬することは許されぬこととして、アラの傍に勿論アラより一段或は數段低度な神としても依然トンヂー神を認存して置きたいのが彼等の念願であるのであつたが、回教々理は絶対にアラ以前に如何なる神格者の存在をも認容して呉れない、茲が彼等の苦悶であつた。

然し巧妙なる妥協點は見出された。即ち回教にありてアラブ以前に他の如何なる神の存在をも認めないがアラブの仕事を補佐し或は代行するものとして且つは又たアラブと人間との交渉も仲介するものとして幾多の天使の存在を認めてゐる。茲が彼等の巧妙なる妥協點であつて即ち彼等はその最高神トンヂーを以てアラブの命によつて人間守護の職務を司る天使ミカエルと異名同一のものと解釋して、尙ほ我等は古來より不幸にして眞の至高神に接するを得ず只僅かにその神權の一部をのみ代用するトンヂーを崇敬して來てゐたのであつたが、今度初めて回教を知るに及んで幸にもトンヂーの本體を簡明し、尙ほも至高神アラブに歸命することを得たことは誠に有難い極みであると云つた調子で解決し去つて居るのである、斯る例は南洋一帯に涉つて各地方々に枚擧するに暇なき迄無數である。此の邊は我

が宗教史上に於て平安朝の初期即ち密教興立期に於ける本地垂迹の説による、我が古來の諸神と佛教諸佛菩薩との圓融的説明と一寸似て居る所である。

兎に角、斯る巧妙な教理上の妥協は隨處に試みられて、而も夫れ等は悉く成功した譯であるが、是等巧妙なる妥協を成立させる迄にたちたき精神上の若悶を経験したものは實は彼等中の極く少數であるに止まつて、その大多數の者は依然性來の樂天的性情による氣紛れと御座なり氣分の慣用によつて、別に些したる苦悶なしに容易に回教々義を攝容したものだと思はれるのである。實際、今日に於ても彼等の大部分は回教徒なることを誇りとして、敬虔に回教儀律の命ずる所を遵奉し修行しては居ても、その教義の理解に關しては全く無關心であり無智無識であつて、夫れ等に多少とも理解

ある信仰の徒は實に寥々曉天の星のそれである。尤も、コーラン即ち回教の經典は、彼等が回教徒たるべき當然の義務として、その幼時に於て僧侶或はハジと稱する信仰上將た實社會生活上特別の尊敬を拂はれて居る特種の階級者から教へられるのであるが、夫れは單にコーランの章句の暗誦だけで、加之もアラビヤ語の原典でやられるのであるから意義の解釋などは勿論一向に解らう筈もなく、又實際わからず仕舞に仕舞ふのである。一體、回教では經典を異常に神聖視するので、コーランの翻譯など云ふことは直ちに經典の神聖を犯す異端者の瀆神的行爲として一般嫌忌されて居る有様であつて古くは嚴かに禁壓されて居たものである、近來漸くにして或る一部の回教徒の覺醒的運動の勃興につれてコーランの各地方語の翻譯は實現され、南洋に於ても各行置きに原文と譯文と對照したコーランが行はれて居

ることは居るが、その精讀或は研究などと云ふことは、一般普通の教徒は勿論のこと僧侶それ自身でさへ依然として容易に手を染めないと云ふ有様であり、又アサ、エル、サリブとかバスタマ、サ、サラチン等と彼等の所謂回教の智識を授くべく用意された書物など少からずありはあるが、その内容は「問ふて曰く「太陽は何故廻轉して息まざるか」答へて曰く「彼れは實にアラゝに斯くあることを誓ひたればなり」又問ふて曰く「男は何故に女に優れて貴きものなりや」答へて曰く「アラゝは實に斯く造り給へればなり」等と實に愚にもつかぬこと計り勿戴相に書き列ねられてある一顧の値だにせぬ馬鹿氣切つたもので、斯るものが眞面目に鹿爪らしく講釋されて居るのであるから全く以て大多數の回教徒の愈々無理解無智無識さは推して知るべしである。

## 南洋に於ける回教の現状

精神的にも外形的にも政治的にも我が徳川時代に於ける佛教に酷似して居る……彼等は信仰把持に氣紛れてあり儀律實踐に遊戲的である概評して異端的回教徒と謂ふべし……スマトラのパドリ回教徒は側外で典型的回教徒と謂ふべし……宗教的にはシャ一派に屬すべきか……パドリ回教徒の十日祭は面白し……

これを要約して云ふならば、南洋に於ける回教の現状は、我が徳川時代に於ける佛教のそれに酷似したものであると思はれる。即ち、我が徳川時代にありては、僧俗共に康安に馴れて、其處に何等心靈の深酷なる、欲求に基づく、眞摯なる信仰なく、一般に時代精神の佛教に對するは、兩者全々無關係であるかの如く、人は各々何宗かの寺に屬し、家庭には佛壇を莊嚴して讀經の聲を、鐘鼓の音に和せしめては居るが、夫れは單なる因習的雜行たるに止まるものであり、道に念珠を携ふる寺詣の俗は、

行き交ふと雖も、夫も又或る一部の生活餘裕者にして加之も所謂隱居して殆んど表面的には社會生活を退きたる輩の殆んど娛樂視された所謂後生願ひの佛いじり者流に限られたかの觀をなして居たし、僧は又宗制の確立と民衆の傳統的歸屬とによつて生活の保證を得たるに満足して、持誠勇猛精進して自行化他の勤行は之れを忽にして、音單に朝夕佛前に無意味なる讀經することを唯一の修行と心得へて、深く佛教々理を透徹して衆生濟度の本願に精進せんとするものさへ迹を斷ち、會々斯る眞の僧寶を以て許さるべき智識ありとするも夫れ等は徒に俗世間を超越することを以て得たりと心得て深山邊域に踏晦して徒らに獨り己れを清くすることのみに勵み、眞に僧俗共に同時代は精神的に佛教と絶縁して、佛教の精神將た眞骨頂は最も晦暝された時代であつたのである。轉じて今日、南洋にその宗教、回

教を視るにその状、宛として然るものがある。教徒の殆んど凡べてはその教理に關して全々無理解であり、甚だしきに至つては教祖の名即ちマホメツドをさへ知らぬものが大多數を占めて居る、斯る教理の無理解は雷に單なる父祖傳因の教徒の大多數たるに止まらざるのみならず、當然回教々理の如何なるものなるかを説き、教徒を驅つて正信なる宗教生活將た道德生活に導くべき僧侶の内にさへ、可成りに無智無識の輩が少からずある有様であることは既に述べた通りである、我々が南洋を旅行してみると、その到る處の町々村々にメシジ即ち回教禮拜堂の孰れも普通一般家屋より際立つて莊嚴されて建てるあるものを見る、金曜日即ち回教徒の以て聖日となす日の正午でもあれば、其處には多數教徒の相集つていとも此嚴に又敬虔に祈禱禮拜が行はれ居るのを見ることが出来るし、又殊更に金曜日と云はず、

何の日でも彼等の信仰箇條が規定せる一日五回の禮拜時刻に會するならば場所はその屋内たると外野たると路傍たるとの別なく、彼等は鞠躬如として起立し跪坐し叩頭し誦文する敬虔なる祈禱禮拜の隨處に勤行されつゝあるを見る事が出来る、更に縁を以て彼等の家庭に出入するを得るならば、彼等の日常生活行爲がその飲食の些細事に到る迄、悉く回教儀律の規定に規矩して爲されつゝあるとをも看取し得る、以て彼等がその信仰把持の敬虔と熱烈と、その宗教生活の眞摯にして清淨なるべきを思ふて嘆美するの情を唆られるとは往々にして有之るとであるが、一步更に深く進んで仔細に彼等の信仰とその宗教的世間生活の内秘的考案をやるならば、當初嘆美の情は須臾にして憎惡の情と化り、次いで憐愍の情をさへそゝられるに到るであらう。實際、彼等の斯く眞摯らしい一敬虔らしい宗教的世間生活



も實は生活餘裕者の半娛樂的の行爲であるか、或は單に彼等の無意義なる傳習に則る半夢幻的の勤行たるに止まるもので、其處に何等嘆美すべき深酷なる精神生活の欲求の發動するもの、皆無なることを看取し得るからである。

但し之は勿論、一般的論評の歸結であつて例外は何時如何なる場所及び事象にも必ずある。彼のスマトラのバダン高原地方土人の信仰生活の如きは其の發すると眞摯なる精神生活の欲求に存し、その勤行する所の敬虔なる、喩へ彼等にその教理に對し徹底したる理解なしとするも又以て嘆稱すべき美しき信仰生活の標本であり、その回教宣布精神を高潮してその表現を所謂神聖戰爭の手段に借り、隣近原始的多神教徒に所謂『經典と劍と』を持って改宗歸依を強ふ邊り、その信徒は數にして僅かに萬餘に過ぎ

ず、地は南洋の邊陲スマトラ脊梁山脈中の一小盆地に限られて居るとは云へ、眞に回教の好縮圖なるを偲ばせられるのである。この嘆美すべきバダン高原地方の回教は普通にバドリ回教と稱せられて居るもので、十三世紀の中葉アラビヤの宣教師アリフによつて傳へられた純正なるシャイ派の信仰を熱烈に傳承せるものである。その教團の團結力の強固なること、神意の尊重に絶對的なることは、以て幾多の他派回教々團中特異に強烈なるものである。元來シャイ派回教は其の名自らが正統なる信仰を意味するものであつて、西紀六百六十年即ち回教曆第四十一年、教祖マホメットの開教最初の信者であり且つは俗系に於て甥に當り教祖の没後は常に特に其の教勢の支持と擴張に盡瘁して名望教團を壓した第四世の教主アリが、反逆者ムワイヤの爲に弑されて、回教の教權は異端的なる反逆者に篡奪せられ、

正信なるアリの信徒は兇惡にして執拗なる篡奪者の迫害を相率ゐて先づベルシヤに避け、此處にアリの子ハサン、フサインの二人を立てて團結の中心となし、彌々正信確乎たる信仰に基づいて教團の強固を保ちつゝ、機を以て常に篡奪者オムミヤ朝の暴戾に潰されたる回教信仰と道德的に墮落したる教團を正信淨潔なる昔に復さんと相勵み合つたもので、而も斷えず物質的に強盛なるオムミヤ朝の執拗なる壓迫に對抗し酷虐され通して來た歴史的事相は多年の間に自ら熱烈なる信仰と強固なる教團と火の如き回教精神とを把持し高潮させた。而もその主張する教理の基調をなすものは、即ち教祖の教を繰返すものゝみ救はれむと云ふので、アリを尊んで實に教祖マホメツドの權化なりとなす一派である今日、ベルシヤを中心として東南部アラビヤ、コーカサス、中央亞細亞、アフガニスタン、ベルチスタン、

印度等の主として東方諸地方に擴がつて信奉されて居るのは主として之れで、南洋に於ては此のバドリ回教徒は勿論のこと他の南洋諸地方の教徒も亦之れに屬すべきものであるが、只その信教事相が可成り潰破されたものであつてバドリ回教徒のその如く斯く標本的でない迄のことである。

シャール派回教徒の他派に比してその信教事相上特異なるものは、回教曆正月の初めの十日間に涉つて熱狂的に催される十日祭即ちダヘがそれである。之れは彼の反逆者ムワイヤの教權篡奪の慘禍をベルシヤに避けて隠忍能く窃かに恢興の時機到來を期して居たアリの遺徒が、會々元兇ムワイヤの死して嗣子エチドの暗愚なるに乗じて、西紀六百八十年、決然起つて膺懲の軍をメソポタミヤに進めてケルベラの曠野に陣し、此處にオムミヤ朝の大軍を要撃して力戦十日善く戦つたのであつたが、衆寡敵せず、正信の回

教軍は遂に矢盡き刃折れて千秋の下、無盡の恨を吞んで主將フサインを首めとし全軍悉く貴き血潮にケルペラの砦礫を染めて壯烈なる殉教の戦死を遂げた史實を、追鑽し仰慕する祭禮であつて、此の期間フサイン殉教を取扱つた十齣よりなる宗教劇は其各々の日に一齣宛演ぜられて、此の凄慘壯烈なる劇に感奮させられた教徒は大勢行列を組んで各々手々に黒色の大旗とか白布の小旗とか黒地に赤青黄緑等の數點を表した方形旗とか黒色或は綠色の三角旗等、古來回教の所謂神聖戰爭に回教軍の旗標とした所に模した大旗小旗、さては家とか馬とか其の他奇怪なる型像を飾り立てた花車を曳摺廻して、皆口々に殉教者讃仰の歌を高唱しつゝ猛烈な示威行列をやるのである。祭禮の第九日の夜は即ちフサイン以下諸將士の壯烈な戦死の時刻に當る譯で第九日十日目に於ける彼等の熱狂はその極點に達するのであ

る、是等昂奮し切つた教徒は往々にして異教徒と衝突し流血の慘を見ることとが十日祭最後の幕であるかの慣習となつて居るのである。新聞電報などにて屢々報ぜられる印度回教徒の印度教徒との鬭争の如きは、その多くは斯した十日祭の幕切れに突發するのが常であり、バドリ回教徒の場合はその北境に非回教徒のバタ族と隣りせる關係から神聖戰爭となつて腕力に訴へてバタ族の回教歸信を強ふることとなり、爲めに和蘭植民地政府の地方治安を搔亂し、政府はその鎮壓に時に屢々少からざる軍隊の遣派を餘儀なくさせられると云つた有様である。

以上、南洋回教の現状の我が徳川時代佛教のそれに酷似せるものなることを述べたのであるが、その酷似さ加減は常に社會事相の現象上のとたるに止まらず、その對爲政者關係即ち政治的事相まで酷似せることを思はせら

れるのである。彼の徳川幕府の對宗教政策が、佛教各宗各派の宗制の整理と、その宗勢の固定を以て社會治安上好都合なるものなる見解に立脚して、一切の施設と干渉と強制を敢行し、民衆は此の政策の實施さるゝ結果、自由意思を以て從來の宗門を變更することの不可能即ち信教の自由を否定されたにも拘らず、之れに對して何等の不便不足を感ずることなく、寧ろ爲政者の斯る政策の存在さへ意識することなしに至極平氣で居たし、僧侶は此の政策の實施によつて期せずして自家生活の安固を保證されたかの結果をきたして、寧ろ之れを徳とし敢て自由なる宗學の講究と宗勢擴張の不可能となつたことを不満とも不合理とも感ぜないで居ると云ふ状態であつた。尤も、中には彼の妙滿寺日經の如く敢然として幕府の懷柔と壓迫に抗して自由なる教義の宣布と傳導に従事した結果、幕府の專横暴戾なる刑に

禍せられたなど云ふ事實もあつたが、總體的には幕府の此の政策は懷柔と壓制との巧みなる使ひ分けによつて可成りに手際よく成功して、信教の自由は拘束され、宗門の所屬は固定され、傳道と宗論は嚴禁され、而も時代世相の康安偷樂なりしとは相俟て當時の佛教をして一般的に精神なき形骸のみの死佛教と化了した事實が今日、時と處と施格者と對格者と對象とを全々異にしながら略々移して以て南洋回教の今日の状態に見ることが出来るのである。

蓋し、今日二億二千萬を超ゆる回教徒の大多數即ち一億八千萬は政治的獨立を拒否せられて異教徒の統治下にあり、就中その一億五千七百萬の大多數は彼等回教徒の甚だしく偏狹なる異教徒觀の殊更に嫌忌し憎惡する基督教徒の統治下にある事實と、彼等回教徒はその信奉する所の天神觀の徒

に偏狭なると、把持する所の回教道徳なるもの、これ又た異教徒に對して偏狭なる、例へば消極的にしては異教徒に對する不徳義なる行爲將た罪惡は必ずしも之れを回教々義に律して罪惡ならざること、積極的には流血の慘劇を敢てしても天神の爲め異教徒を改宗歸信せしめんことは無上極大なる善行であり功績でありと確信せること、加之も是等偏狭なる獨斷は熱烈に固執され居る事とは、茲に是等回教徒を自家統治下に包含する基督教徒爲政者の常に周密なる用意と至大なる手腕を以て統治の實績の圓滿を計らねばならぬ譯となつたのである。

#### 殖民地政府の對回教徒政策

菲律賓政府は放任を主義とする半軍政下に特種扱ひして居る……蘭領東印度政府は陽に放任陰に抑壓を事として居る……英國植民地政府は無干渉主義の下に懷柔を事とする……回教布教運動の抑止と基督教改宗の奨励とは三者孰を一つにする……

殖民地は政府の對回教政策は重大なる意義を以て講究され施設されねばならなくなつて居る次第である。而して南洋に於て此の至難事の解決に當らねばならぬ者は英國であり和蘭であり北米合衆國である。

米國治下にある回教徒はその數に於て少ない。即ちスル―及びミンダナオにありて僅かに五分餘であるに過ぎないが、彼等は今日尙ほ比較的野蠻の状態にある兇猛な種族である。て菲律賓の爲政者は是等を統治するに單にその文化の程度のみを以てしても尙ほ到底基督教を奉ずる菲律賓人と同一軌下に律し得ることは不可能事であり、且つは近く或は菲律賓の自治獨立を認めんとする米爲政家にとつては、當然、彼等半開の回教徒を菲律賓統治上重大なる考慮下に置けない譯で、乃ち菲律賓政府は彼等を統治するに特種なる半軍政下に置いて全々菲律賓の外藩を以て臨み、彼等に甚だし

き地方治安を擾亂する目的の行爲なき以上、殆んど菲律賓の一般施政方針と無關係なるかの状態の下に放置してある。此の政策は實に賢明なるもの、一つと稱するに足るものであるが、米國の如く特種なる國家組織の下に特異なる政治を敢行し得るものではない以上は容易に實行し得べき的の政策ではない。或は寧ろ米國政府は殆んど全々その殖民地の對回教徒政策など云ふことに就ては考慮してゐない結果が偶然にも此の成績を擧げ得てゐるものと評する方が適當であるのかも知れない。兎に角にミンダナオ、スルールの回教徒統治は好成績を擧げて居るのである。

然し蘭領東印度殖民地政府にとりて本問題は非常に重大である。従つて和蘭爲政者は常に本問題に對しては驚くべく神經過敏である。その統治下にある回教徒は三千六百萬を超えて實に全人口の九割八分弱を占めて居

る。これは全々回教徒の地を統治せねばならぬ譯であり、而も夫等の回教徒は一般的に氣紛れな異端的南洋回教徒の中でも比較的熱烈にして敬虔なる信仰の把持者であり、その教義に對して理解あり行動に於て節度あるサリカイスラムの如き教團がある、今は昔のことに屬して居るが和蘭の此地にその主權を確立するに當つては彼の爪哇戦争の如き、バンジャルマン戦争の如き將たアチオン戦争の如き苦しき經驗は或は尙ほ再び繰返されはせぬかと云ふ危険に脅かされて居ないでもない。加之、蘭領東印度は實に和蘭本國の寶庫であり、其の興廢は直ちに和蘭本國の經濟的存滅の鍵鑰である従つて政府當局は彼等の信仰の自由と教義の尊重を聲明しつゝ常にその思想の推移に注意し、儀律慣習の改變に努力して、重大事件に會しては主として懷柔を主義とし、些細事件に對しては抑壓を主義とする懷柔と抑壓の巧

みなる使ひ分けに勞心しつゝ、今日にては兎に角に大體に於て無事平穩に統治の績を擧げてゐるものと言ひ得る。

これに較べると英國の殖民地政府は遙かに都合よき地位にあるので、夫の統治下にある約二百萬の回教徒はその氣紛れさ加減と異端的なるものに於て南洋回教徒の標本的なものである丈に、その統治上殆んど危険性を帯びてゐないものであり、従つて政府當局は殆んど無關心の状態に於て彼等の自由を承認して無干渉主義に則して放任してゐる。然し、この無干渉主義の放任は不知不識の間に經濟的世相に於て吾等なる彼等を資本的侵入の壓制下に放置するものとなり、其の結果は彼等の生活は常に經濟的に脅威せられ、隨處に施政を批難する怨嗟の聲を聞くこととなる。此の状態を依然放置して特別なる扶助掖導の方法を構ぜざるに於ては、或はその統治權を

危ふするの結果を醸すべき慮は無いと樂觀する譯に行かないのである。於是、聰明にして利己主義で而も狡智なる爲政者は此の禍根を徹底的に截除すべきに代へて、回教徒中の有力者將た有識者の懷柔を以て安値なる良策と心得て、對教團的には回教徒保護局或は之れと同匠好の一行政部局を設けて夫等有力なる回教徒をその評議員に官選して、名儀のみの回教徒の福祉増進策の投議に實際の施設を未設の以前に晦暝し、或は單に社交的機關に過ぎざるが如き回教徒協會の組織に、安價なる好意と聲援を恩惠する等の輕薄行爲をこれ事として居る有様で、之れを嚴格に批判するならば、その無干渉自由放任は主義として賛成すべきであるが、夫れを實際に行ふに當つて四圍の實相を考慮の内に容れないで適當な保護掖導を忽にし勝ちであることは甚だしき不親切であつて、或は利己的不徳義であると批難され

はせぬか。

以上、叙説せし如く英、蘭、米、各々その國情とその統治すべき回教徒の狀態の異なるがまゝに、その執る所の對回教徒政策に多少の相違はあるが、三者共に軌を一つにする所は、回教布教運動の抑壓と回教徒を導いて基督教に改宗せしめんとする運動の獎勵將た援助の二方面に於てある。而して是等は消極積極相俟つて回教の勢力を弱めんとするものである。

回教は布教運動の抑壓は南洋に於てはさのみ困難なる仕事ではない。何故ならば、今日南洋に於ては云ふに足るべき布教運動は行はれてゐないからである。尤も既に述べたる如くバドリ回教徒の如きを熱烈な布教運動を屢々敢行する者は無いが無いが、その努力の蹟を見るならば、彼等が數世紀の長年月に涉つて、尤もそれは間歇的に行はれたものではあつたが、

その手段の所謂神聖戰爭の猛烈なるを撰んで執拗に續行されたにも拘らず、能くその目的を達して回教に歸依せしめ得たる者は、今日約五十萬を以て數へらるゝバタ族中僅かに十萬餘に過ぎない有様で、而も之れを現に熱心にバタ族布教に盡瘁せる獨逸宣教師が僅々十數年間にして能く三十餘萬の基督教信者を得たるに對比するならば、回教の布教運動は基督教のそれに比して遙かに効果乏しきものなるを知るべく、況やその謂ふべき回教布教運動は少數なるバドリ回教徒のバタ布教運動に僅かに存するのみで、他には斯る運動は皆無と稱するも憚らざるの現状であるからである。然しながら、斯る現状を以て直ちに將來とも絶対に回教布教運動は起らぬものなりと斷案することは慎まれねばならない。素と回教徒はその教義上の道徳として、異教徒を導いて回教に歸せしむることを神に對する最善至高の



聖務なりと確信するものである。彼の氣紛れなる回教徒として標本的なる馬來半島の異端的回教徒のしかも無力無識なる者にありてすら、狡猾なる異教徒が何等か爲めにする所ある一時的虚偽の改宗をさへ無上の法悦を以て欣喜雀躍する位い此の觀念の眞摯なるものがある。斯る故に、何等かの時代に於て四圍の状態が彼等をして決然起つて回教宣布を敢行せしむべき時機が絶対に來ないとは斷言し得ないのである。而も一朝かゝる時節の到來するに於ては、彼等の覺悟と事に従ふ熱心は勿論のと、其手段も所謂神聖戰爭の如き時代錯誤の拙劣なるに代ふるに基督教のその如き組織ある近代的手段に依るに於ては、今日尙ほ原始的多神教の低度なる宗教に安心せる四百萬餘の半開南洋土人は靡然として彼等の教に歸するとは又た量るべからざる未知の事象である。現にチンブイツを中心として阿非利加中部

地方に行はれつゝある近代的手段方法をする回教の布教運動は、その成果の顯著なる之れと相拮抗して布教に盡瘁せる基督教宣教師の常に驚嘆する所である。之れを要するに、今日南洋に於ては回教の布教運動は無い、然し將來とも斯る運動は決して起り得ないものであるかと云ふと、それは寧ろ起り得べき性質のものであり、而して一度これ起らんかその勢力は懼るべきものであると謂つべきである。従つてその今日未だ起らざるに先つて隠然これが抑止に努めつゝある殖民地統治者の政策は或は以て賢なりと稱すべきである。

### 回教徒の改宗

(基督教改宗は絶對的に不可能なるものゝ如し……改宗の罪惡觀と神の選民たるの持と救世主出現の確信とは如何なる宗教に改宗せしむるとも至難事である……基督教とは教義教相共に相容れず歴史的感情も融和し難い……)

次に今日の回教徒を導いてその幾部分かありとも能く基督教徒と化せしめんとする企劃は、果して成功すべきものでありや否や。自分は嘗に基督教徒となるべきことの殆んどあり得べからざるを思ふのみならず、佛教なり或はその他の宗教を以てしても回教徒の改宗は殆んど不可能事たらん迄至難の事と思爲するものである。彼等がその過去に於て案外に容易に而も無條件に回教徒となり了した事實と、その現状の未だに氣紛れてあり異端的である實相と、彼等が回教徒たるの故を以て現世的に何等の恩惠將た利益をも享受して居ないのみか寧ろその多數は回教徒たるの故を以て物質的困苦缺亡の悲境に沈湎して居る状態とを以て、回教徒の他教改宗は存外容易に實現され得べきが如く思爲されぬてはないが、更に今少しく深く、その實狀を考察するならばその結論は寧ろ反對なるを曉り得るのである。

今日、彼等の四圍の狀勢はその昔彼等が初めて回教に接した當時のそれと甚だしく異つて居る。第十六世紀以後、不斷に襲來する歐人の資本主義的南洋發展將た南洋經營は、既にして南洋を舉げて資本主義的經濟社會と化し去つた。經濟的角逐に於て到底その侵入者の脚下へも寄りつけぬ彼等南洋土人は其の結果、新に建設せられたる南洋の經濟社會の劣敗者となつて、彼等の生活は常に物資擱得の困難に脅かされ通してある。従つて今日の彼等には彼等の祖先が嘗て享有したる天然物資の豊富に祝福されんとは所詮叶はぬ夢となつた。即ち今日の彼等には彼等の祖先の如き生活の餘裕がない。彼等はその強度なる好奇心の満足をさへ彼等の祖先の如く容易に買ふとが出来ないのがその今日の實情である。假りに今、彼等の面前に彼等の好奇心を唆るに足る新宗教をつきつけたとしても、生活物資の擱得に

窮乏たる彼等には染手すべき餘裕さへない有様である。斯る彼等に先づその好奇心を利用して新宗教に觸れしめ、樂天的性情を利用して新信仰を保持せしめんと計劃するも、それは得べからざる空しき計劃であらねばならぬ。生活上些の餘裕だも無い者が怎して樂天的であり得やう。然らば先づ彼等の生活の安固を條件として新宗教に接せしめ、彼等の生活を保證しつつ、新信仰を勸持せしめんとすれば如何。之は基督教徒のその布教に當り、常に慣用する所の賢明なる方法である。然し、之れも亦た回教徒に施しては無價値なるものである。回教にありては、異教徒を導いて回教に歸せしむるをその天神に對する聖務と儀制せると同時に、回教を棄て、異教に改宗するとは最第一の罪惡と教へられてゐるのである。南洋の回教徒は前に屢々云ふが如く、斯く異端的であり氣紛れ教徒ではあるが、此の儀律は確守し

て居るものである。彼等は尋常一樣な壓迫や誘惑によつては之の最第一の罪惡を敢て犯し得ない。加之、回教はその教徒を以て神の聖なる選民と教へてゐるのである。回教徒が唯一至上神アラの神聖なる選民なりと云ふ確信と矜持とは寧ろ頑迷なる程度に把持されてゐる。彼等にとつては此の矜持に換えるべき矜持の何物をも認め得ない。回教は彼の佛教が彌勒將た上行菩薩の出世を豫識するが如く、又た猶太教がメシヤの降臨を約束せるが如く、回教々勢の窮まつた日、出て、之れを復興すべき使命を有つマーデーの出現を教へて居るのである。彼等が之れを信ずるとも亦た篤く固い彼等は今日、その政治的にも經濟的にも殆んど劣敗者の域に沈湎して生活上の困窮と精神上の不満とは可成りに深酷沈痛なるものがある。然しながら彼等は更に尙ほ以上に困窮し苦惱するところがあるととしても、常に再生の救

世主マードーの出現を確信し翹望して忍耐し得る。昔に忍耐し得るのみならず、彼等は四圍の情勢の非なれば非なる程マードー出現の機に近づけるものなることを信じて異教徒の想像だもなし得ざる觀喜を感じ得るものである。詮ずる所、彼等が改宗の罪惡觀と選民たるの矜持とマードーの出現を確信し確保し確信せる以上、回教をして他の如何なる宗教にも改宗せしめんとは至難と云はんより寧ろ絶對に不可能事であると云ひ得るのである。殊に基督教を以て改宗を誘はんとする企の如きは其の當然失敗に終るべきものなることを論斷するには、更に多くの理由が有り過ぎる位い多くあるのである。

理由の第一は、彼等は基督教徒が嫌ひてあり、基督教が嫌ひてある。教祖マホメット在生當時に於て、基督教と猶太教とは實に彼れが教敵の最な

るものであつた。回教が其の教義の根底を彼のセム民族の宗教即ちヤーベ神信仰に立脚して開教されたものである以上、等しくヤーベ神信仰の上に築かれたる猶太教なり基督教の回教々敵たることは當然のことなのであつた。彼の回教經典コーランはその隨處に猶太教將た基督教の全々瀆神的教へなるとを力説して、回教徒としてその天神アラに當然盡すべき聖務の至上なるものは、實に基督教を潰破しその教徒を征服即ち回教に改宗せしむるところとてあるとして、その開教當時より不斷に力強く且つ嚴かに宣言する所である。彼の基督教の三位一體説の如きは回教々義としては全々許すべからざる瀆神的邪説であり、エス、クリストを以て神の子と稱するが如きは言語同斷の妄言であると罵られねばならない。且つ又た、彼等は基督教徒の常住坐臥を見聞するに於て、その回教儀律に則して夫れ等を律し、夫れ等

の到底赦すべからざる破戒不道德のものなるを争ふのである。例へば基督教に於て十字架を以てその信仰を表徴し、或は聖母マリヤの像を拜跪するとなどは、偶像破壊を以て天神に對する教徒の聖務の一つと意識する回教徒の以て破戒行爲とする所であり、回教儀律の規定する汚れたる物或は行爲、例へば豚とか或は豚肉を食ふとかするとは、回教徒の瞥見して直ちに夫れ等を不淨なる人間なりと斷了して近づくことをすら忌むのである。斯る日常茶飯事に於て爾かく相容れざるものが回教と基督教との間に餘りに多くあり過ぎる。且つ又、基督教間に於て一つは羅馬教派と云ひ或は希臘教派と云ひ又たプロテスタント云ひジエスイット、ビュリリタント、クエーカー等、枚擧に暇き程、種々雜多に分派して、而も夫れ等の各派間に統一なく、交渉なく、喩へ夫れ等の各派が相對峙して紛争を事とせぬ迄も夫

れ等の間に提携するあるなく親和するなき事實は、回教徒をして又た以て基督教の天神ゴツドの何等統一力なき劣等神に過ぎざるものと速断せしむる因となつて、その教義の無價値なるものなると蔑了せしめてゐるのである。斯くの如く回教徒はその宗教的生活に於て、基督教を認容し得ざるのみならず、現世的將た物質的生活に於て、又た基督教徒に對し非常の怨恨を把持して居るのである。彼のサラセンの衰滅後、回教徒が常に基督教徒に壓迫せられ、征服せられ、冷遇せられつゝ今日尙ほ基督教徒の統治下にある不名譽は、之れを單に弱者の強者に對する卑劣なる僻み根性とするも、又た回教徒の基督教徒に對する怨恨の一朝一夕なるものでないことを知るべきである。而も之は根柢淺き一時的の嫌忌將た憎惡ではなくて、深き教義上の相違に根ざし、長き歳月に培はれたるものなるだけ、益々以て回教

徒の基督教改宗は不可能事に屬すと斷了し得ると思はれるのである。事實、回教徒の基督教に改宗する者は南洋に於ける異端的回教徒にありてすら殆んど皆無のこと、云つて差問へないのである。その南洋土人にして今日基督教徒たるものは、回教に接觸することなくして、原始的信仰より直ちに基督教に這入つた者のみである。唯一つ例外として、爪哇のプキテンゾルの附近のデボ村落の住民が半世紀以前に、一村を擧げて回教を捨て基督教徒となつた事實はあるが、此の事實は直ちに以て南洋回教徒の基督教徒改宗の容易なることを證するに足るものではないのである。素とデボ村落は天刑病患者の部落であつて村民五百悉く癩病に悩まされて居た、近隣の回教徒は之れを以て、面に信仰を装ふて心に神をに蔑にせる者の當然なる刑罪を受けた者と勝手に決めて仕舞つて、その瀆神を責め其の生活を壓迫し

た。デボの村民は全く立つ瀬が無い窮迫した悲惨な生活に泣いて居た。所へカソリックの一宣教師が慈惠施療を旨とする彼等の布教上の慣用手段を巧みに施して、その回教を捨て基督教に改宗し得させた次第で、斯る特種なる條件下に於ていともない以上は、依然として回教徒を導むて基督教將た他の宗教に改宗せしむるとは、殆んど不可能事であると思爲せらるゝのである。以上、甚だ概略ではあるが略々南洋の回教に就て述べた譯である。尙ほ次に少しく回教々義或は儀律を述べつゝ、傍ら夫れ等が南洋回教徒間に如何に理解され、又如何に遵奉されて居るかを觀察し度いと思ふ。即ち回教の教義及び儀律を緯として縦に南洋回教徒の實情を述べ度いと思ふのである。

## 第二 段

今日迄、或は尙ほ今日に於ても回教徒と殆んど何等の直接交渉を有たない我が國人にとつては、回教に對する理解などと云ふべきものは殆んど皆無と云つてよい位である。従つて我が國人の回教に對する概念は、敢て怪力亂神を語る荒唐無稽の極く幼稚な宗教とは思つて居ない迄も、徒に偏狭な面して獨斷の多い宗教であると云ふ位いの極く皮相なと云ふよりも、寧ろその多くを謬つたものであるを逃れない程度のものであるとは止むを得ない次第である。が、少しく眞面目に回教なるものを觀察するなれば、それは相當の哲理の上に立脚して、地上に人間の生活を祝福せんとする眞摯な面して進歩した宗教の一つであると云ふとが合點出来るべきである。

### 回教成立の要素

天神アラ一の實在と人間生命の不滅を信ずる一種の宿命説を哲理として人間相互の親

和福祉増進を目的とする………教義の本來は世界的で回教社會のみを祝福せんとする如き偏狭なるものではない………人間相互の親和福祉増進は五箇信條の嚴修と回教儀律の實踐によつて實現されるものとする………

即ち回教成立の要素を點檢してみるならば、夫れは彼の所謂、宇宙萬物の創造者にして支配者であり、絶對不可犯の唯一至上の權威者としてアラ一即ち天神の實在を承認すると云ふことと、吾人人間の生棲すべき處は唯今日の現世のみならず、來世に於ても亦たその生棲すべき場所を有つものであると云ふ二つ、即ち絶大權力者の實在と人間生命の不滅との二つを肯定する哲理に立脚して、而して現世に於て人間相互の親和と福祉の増進を目的とし、この目的を達成せしめんが爲めに人間各自が自律的に各自の煩惱を禁喝して、相對的に相互の感恩報徳を手段とする進歩したる宗教であると云へるのである。

而してその根底とする所の哲理は、一種の宿命説であつて、彼の現世に於て起る是非善惡禍福吉凶等社會萬般の事相は皆悉く神意の發動によるものである、神は實に是等凡べてを豫め斯くなるべく又た斯くあるべく定めて、たゞ敢てこれを神秘の裡に秘して容易に人間をしてその毫末片鱗をだも窺ひ知る能はざらしめて居るので、この世の中的一切物は皆悉く豫め既に定められたる運命の下に生じ長じ働き盡ては滅びるのである、而して今世に於ける各自が一切の行爲は、これ來世に於ける新生命の幸と不幸とを分岐する因となるものであると説くので、此の哲理は往々にして他力本願の教相を採つて現世的努力を忽せにして徒に無氣力なる後世願ひの消極主義者將た厭世主義者を慥え上げるか、或は他の一面に於て現世的に無責任なる御座なり主義者或は樂天主義者を造り上げることになり易い危険性を

有つてゐる。今日、南洋に於ける回教徒の無氣力無責任なる異端的回教徒となれる一面の原因は、實にこの回教成立の根本要素が彼等先天的の悪い性情に牽牛附會的墮落の教相をとつた結果であると言ふべきである。

前にも述べた如く、當初回教興立の直接目的が當時混迷して居たアラビヤの世相を革新することにあつた關係上、回教の理想とする職分は今日に於ても尙ほ完全に世界的でなくして、その人間相互の親和及び人間社會の福祉増進も、回教徒相互及び回教徒社會と云ふ一種偏狹なる或る特定の條件下にあるかの觀をなして居ることは事實である。が然し教祖マホメットの眞の理想とする所は決して斯く特定の條件下に局偏さるべきものではないので、その教理の上には、彼の基督教のそれの如く廣く世界的のものである。唯今日斯く偏狹なるものなるかの加き相を現して居るのは、



回教の教團的道德即ち布教の手段としての神聖戦争の觀念が歴史的に偏狹ならしめた罪であつて、その本來の理想とする人間相互の仁慈博愛の主義主張は元より難すべき性質のものではないのである。

要するに回教は絶対不可犯の唯一至上神格の實在と、來世の實在とを肯定する宿命の哲理に立脚して、世界的に人類文化の増進を目的とする宗教であつて、その理想現實、目的達成の手段としての煩惱の禁喝と感恩報徳の理論は、回教特異なる教相を形成して居るのである。その純宗教的手段としては彼の五箇信條を規定して自律的將來絶対的に歡心修行を強要する一方、相對的將來互律的手段としては彼の煩瑣なる迄に廣汎なる回教儀律を形成して、二つながら、絶対權力神の威力を以てその實踐を教徒に強要し、後生善處の化徳を以てその勵行を教徒に誘起して居るものなのである。然

らば、その所謂五箇信條とは如何なるものであるか、回教儀律とは如何なるものであるか。

五箇信條即ちルクム、アル、イスラムとは一箇の信仰即ちイマンと、四箇の修行即ちデインと都合五箇の自律的絶対的宗教信條である。即ち唯一至上神アラアの實在を信仰すること、一日五回以上アラアを祈禱禮拜すること、回曆第九月即ちラマザン月及び其の他の或る期間に齋食すること、聖地メッカへ巡禮すること及び敬虔なる貧者へ布施することの五箇條が夫れである。

### 天神アラアの信仰

神の屬性の峻嚴なる一面のみが極説され過ぎる……經典コーランを尊重し過ぎる……南洋回教徒は一般に經典に無理解であり教祖を意識せない者も少くない……土耳其皇

帝はカリフとして一般回教徒尊信の中心であるが理論的にはラムを尊信する一派がありシヤ一派教徒の如きは名實共にシヤリフを尊信せんとする……尊信すべき教皇の不一致は教團結上の一大障礙である……土耳其皇帝とラムとシヤリフと孰れが眞に尊信さるべき教皇なるか……スンニ派回教徒は教祖言行録を經典と等しく尊信する……

其第一の天神アラ一の信仰は回教存立の根本生命となるものである、従つて此信仰の強弱は直に晩成宗教としての回教々團の隆替を表徴するものであり、回教徒各自の現世將た後生の禍福を羈束すべき標準となるものであるが、一體、回教の天神アラ一を説明するや、その知質的絶対不可犯の神格及び唯一至上神として全智全能聖明仁慈等其の他一切の屬性は彼の猶太教のエホバ神或は基督教のゴッドと全々同一のものであつて回教殊更なる特異點を見出し得ない、唯、異なる點はその説明に於て彼のニホバが殊

更に猶太人のみを祝福する神として著しく偏狹に證明され、彼のゴッドとしては仁慈なる神の愛が極度に力説されて居るに比して、回教に於ては峻嚴なる神の威力の一面のみが徒に力説されて、愛の一面は寧ろ閑却されたかの觀があるの相違である。彼の「基督の神は慈母の如くマホメツドの神は嚴父の如し」と云ふは、蓋し一言にして能く這箇の相違を言ひ盡し得たものであると思ふ。従つて敬虔なる回教徒のアラ一に對する感情は、畏るべく遵從すべき至上絶大の專制君主に對するのそれであつて、彼等としては只管に神意に悖らざるやう、日常の一舉手一投足の悉くをさへ戦々兢兢々躬如として作爲すべく、その禮拜するもそは僕婢の主人に對する敬禮であり、祈禱するもそは災禍に泣いて罪を謝し、幸福に悦んで徳を感謝するの作法であつて、疾苦を求禱するとか或は幸福を希求する等の勝手がましい

ことは遠慮し躊躇されねばならぬ次第なのである。

又た、比の天神アラハ信仰の教理は當然の歸結として、アラハの教義を記録したるものとしての經典コーランを信仰し、且つ又たアラハの教義を傳へたるナビー即ち豫言者として教祖マホメッドを信仰せねばならぬことになるので、恰も佛教に於て佛法僧三寶の崇信と同一軌を辿るのである。

回教の經典コーラン、それは彼等の教へ傳へらるゝ所によれば、彼等の爲めにその生活上の一切の軌矩を記載せるもので、その一節一章、はては一字一句、皆悉く敬畏すべき天神アラハの制定し給ふ所のもので、無始の始めより神が常に過去を録し未來を識する天の廣大無邊なる聖机の上で神親ら筆を執つて書き綴り、之れを彼の回教の所謂力の夜、一括して天使がブリエルに賜ひ、ガブリエルは爾後メツカに於てメヂナに於て將た教祖マ

ホメッドが回教宣布の軍陣の間に於て一章或は數章づゝ教祖に傳達したものであると確く信じられて居るのである。従つて彼等のコーランに臨むは、彼の偶像崇拜の徒が偶像に對するに等しき態度と感情とを把持し且つ、顯現して居るので、往々にしてコーラン即ち天神なるかの觀をさへ呈して居ることがある。されば彼等は之れを莊嚴するに寶玉、黄金、絹布を以てし、その表紙には必ず神聖壯重の筆致を以て『淨めざるものをして觸れしむる勿れ』と嚴標し、之れを讀誦せんとするや先づ齊戒し沐浴し、少くとも兩手を淨め口を嗽いだ後でなければ決して巻を展べない。又、その携へ行くにしても常に恭しく奉持して決して自分の帶より下に下げない。彼等の宣誓の形式は常にコーランを接吻することによつてなされることになつて居るし、彼等が人智を以て決し得ざるの重大事件に遭遇すれば、彼等

は先づ敬虔に且つ嚴肅に祈禱して後、徐ろにコーランを執つて之れを無意識的にバツと開く、そして開かれたるページに於て最初に目に留つた文字を採つてその意味する所を解釋してその是非善惡吉凶を占斷する、この場合、目に一丁字なき多くの無學文盲の回教徒も亦た、その綴字の形象を見てこれを繪畫的に判斷してその吉凶を卜すると云ふ譯で、斯る場合のコーランは即ち神意默示の神聖文字と見做される譯である。又た彼の神聖戰爭の征旅に當つてはコーランは即ち彼の戰勝の護符となるので、彼等は旌旗に銘して軍容を光嚴し、胸懷に護持して戰勝自覺の信念の糧とする有様である。

兎に角に彼等の經典尊信は斯く嚴肅である。之れを小慧しくも敢て科學的ならざる迄も常識的にても争ふて、その記す所の單に教祖マホメツドの

苟くも一宗教の教祖として常人以上なる宗教的將た道德的思索の太いなる結晶なり杯と稱して、その記録者將た編纂者の決して彼等が敬畏し歸命する天神アラームにもあらず、將た又た天使ガブリエルにもあらず杯と假りにも口にすることは、之れ直ちに異端邪說の惡魔として必ずや執拗なる彼等教徒の迫害と嫌忌とを豫め覺悟してかゝらねばならぬことである。従つてコーランに就ての神學的神秘的なる研鑽以外は彼等教徒としては甚だしく拒否するゝ所であつて、全篇百十四ヶ章九萬九千四百六十四語三十三萬百十三文字はその一字一語一句一章をさへ改竄し、補訂することは重大なる瀆神行爲であることは勿論のこととて、彼のアラビヤ語の原典を各地方語に翻譯することさへ瀆神行爲なりとして極く近世まで拒否されて居た次第であることは既に述べた通りである。斯る有様であるからに其の教理の眞

意義は一部少数なる回教神學者以外には一般的に全然無智無識の神秘裡に匿藏されて居た譯で、その教相は無自覺の裡に甚だしく獨斷偏狹な陋習を馴致して來て居たのであつた。が、十九世紀の中葉頃から主としてエヂプトを中心とする回教徒の有識階級者の智識的覺醒はウキクリアの宗教改革の機運を助勢して、經典理解を以て一般信教徒の重大なる義務たるべきを主張し、その實現手段の第一着手としての經典翻譯事業に銳意し初めた結果、次第に各地方語の翻譯は出來て今日では英語、獨逸語、佛蘭西語、を初め歐亞各國語に涉つて實に四十幾箇語の翻譯コーランが出來、我が日本語譯のものも外交時報社の出版したものと國譯世界經典刊行會のものと共に一つ二つ出來て居る有様で、南洋諸語の翻譯にありても數年前來先づ爪哇語譯なり、次いでマレー語譯のもの及びアチーン語譯のもの等が出來て居

る有様である。が然し未だ是等は甚だしく普及されて居ないし、コーランの研究が従前の如く瀆神の行爲として拒否せられることだけは改められては居るが、一般に南洋回教徒の異端的樂天的なるは何等かの權威によつて經典研究を強要せられざる以上、自ら進んで之れに當る者は出て來ない有様で、依然として南洋回教徒の經典に關する眞の理解は殆んど皆無であると言ふべき状態である。

次にアラビ信仰の副屬的條件としてその當然なる教祖マホメットの信仰の如きも、異端的なる南洋回教徒にとつては殆んど無關心の有様で、彼等に對して試みにマホメットの何者たるかを試問でもしやうものなら、往々にしてマホメットとは自分の友達の一人で今何村で巡查をして居ると云つた風の寧ろ噴飯に値する答へを得る有様である。之れは一般に回教徒

たるものは其の回教徒たるの榮譽として、彼の基督教徒の所謂クリスチヤンネームと等しくマホメツド、アリ、オスマン或はハサン、タリブ等と同教先覺者の名を彼等各自のホリーネームとする教習がある所から、會々教祖たるマホメツドと自分の一友人のホリーネームたるマホメツドとを混合して斯る途轍もない答も平氣で出来る譯で、兎に角、南洋回教徒の教祖尊信の理解と意識とは斯く混迷して居るのである。が然し、等しくアラビ信仰の當然なる歸結の第三次的なる現代教皇即ちカリフを天神所遣の現代に於ける神聖人格として尊信することは、遠がに異端的なる彼等南洋回教徒にありても明確に意識され、實踐されて居る。

抑々アラビの現代に於ける代官として現世回教徒二億數千萬の尊信を一身に鐘むべき教主としては何人を以て之れと意識し、尊信しつゝあるか。

こは回教の機械的研究上、殊更に重要なるものである。而して夫は名義的には教皇即ちカリフたる土耳其の現皇帝であるべきである。即ち西紀一千五百十七年、彼のマメルーク土耳其の英主セリム一世が埃及を討征して、回教々皇たるの寶器をフワチマ教皇朝の手より奪ひ、之れをスタンブール即ちコンスタンチノープルに移し、自ら回教々皇即位を宣言して全回教徒にその忠誠を要求し、當時多くの回教徒も土耳其の外征的勢威に潛伏してセリム一世の教皇即位を慶祝し、その忠誠を盡くすべきを宣誓して以來、教皇の聖位は代々土耳其皇帝の世襲繼承する所となつて今日に及んで居るものなので、事實、土耳其皇帝は回教々皇として一般回教徒の尊信を鐘めて居るのであるが、彼のオムミヤ朝の教皇篡奪に奮激して起つたシャイ派回教徒は、代々土耳其皇帝の教皇たることを以て教義的には教權と政權と

を混同するの背理であり、歴史的には依然としてオムミヤ朝の篡奪と同一なる瀆神行爲であるとして、之れを否定し、之れに代ふるにメツカ聖殿の宮宰たるシャリフ即ち教主を天神の現世地上の代官として尊信すべしと主張して、十九世紀の中葉以來、屢々カリフに反抗し、アラビヤを擧げて土耳其の政治的羈絆を脱することによつて宗教的純正を期し得べき唯一の手段なりと意識して、逐年小規模ではあつたが所謂神聖戦争を土耳其に對して敢行して居たのであつた。幸に今次の世界的大戦争の終末は彼等が多年の希願を實現してアラビヤを土耳其の政治的羈絆より脱逸せしめ、彼等の自治自決は戦勝列強によつて承認せられ保證せられた今日、シャリフ派回教徒のシャリフ尊信の條目は更に格段の力を以て把持し、實踐せられつゝあることは疑ふべからざることである。而して南洋回教徒の之れは即ちカリフ

フの尊信にあらずしてシャリフ尊信のそれであることは注意すべきである。

斯くシャリフ派教徒が教義に立脚し且つ歴史的憎惡觀念に教唆されて土耳其帝のカリフ尊信を否定し、シャリフ尊信を主唱すると別派をなして、今一つ等しくカリフ尊信を否定しつゝ、之れに代へて尊信すべき者を他に求むる一派の回教徒がある。それは彼のコーラン解釋の四大權威者たる名譽を擔ふ一人であるシャフキの主張を奉ずる一派であつて、その勢力は埃及回教徒の間に牢乎たるものがある。而して夫れ等は、その尊信對象をコンスタンチノープルの回教大僧正即ちラムなりと主張するもので、その理論とする所は、常に神學派回教徒の主張に對抗して、法理的將た實踐主義的解釋をこゝとするシャフキ派一流の政教二權の截然たる分離論に基脚して

居るので、その教皇とラマとの關係を彼の基督舊教國に於ける皇帝と法皇との夫れに準せんとするものである。斯る回教徒の現世に於ける尊信對象の把立に關する上述三派の相異なる主張は、今日迄、全回教徒の大衆、神の名の下に起つて爲す神聖戰爭の實現を不可能ならしめた精神的理由の主要なるものであつて、若し彼の今次世界的大戰裡にあつて仄聞するが如く獨逸皇帝の土耳其皇帝懷柔の目的が全回教徒の神聖戰爭誘起にあつたとするならば、一世の英傑カイゼルの運命の今日なる所以も又た當然である。合點せらるゝのである。即ち彼れが回教の諸事相を理解することの餘りに皮相なりしを憐まるゝのである。

過去は上述するが如くであつた。彼のカイゼルをして尙ほ大いなる誤算を生ぜしめて空しく息んだ。然し將來は如何であるか。こゝは重大にして且

つ興味深き問題であらねばならぬ。即ち、彼等二億數千萬の回教徒の現世的尊信對象の歸一は、彼等の所謂神聖戰爭の實現を可能ならしむる精神的第一義であるからである。然らば之れは如何に歸一されるであらうか。之は又たその問題の重大なるかの如く輕々に速斷了されべき性質のものではない。が然し、之れに關して私見を述ぶることは我れ他人ともに必要なることであると思はれるのである。

先づ回教徒の現世的尊信の對象として土耳其帝のカリフとしての將來は如何。之れは寧ろ悲觀すべき状態にあると自分は思ふ。一體、土耳其帝のカリフとしての尊信は全然、土耳其從來の國家的勢威に左證されて居たことによると云ふべきであつて、其の間教徒の教義的に將來宗教感情に基いて拂はれて居た尊信ではなかつたのである以上、その國情が今日の如く峻



夷して近くその盛大を再びするの逆賭さへつきかねる現状にあつては、回教徒のカリフ即ち土耳其帝尊信の主要條件は全然破却されたと云つて憚らない次第であるからである。その土耳其帝室に寶藏する教皇の寶器と稱する物の如きも、教祖マホメッドが常用して居たと稱する古びた外套と弓と鏝と軍旗と教祖の齒と稱するものと、それから古代に於てカーバ神殿の鍵輪なりと稱する奇妙な鍵錠の六品であつて、その教皇の寶器なりと制定した由來も、彼の最初の教皇篡奪者オムミヤ朝のムワキヤが自家を光嚴せんが爲めに私制したもので、是等はカリフとしての土耳其帝尊信の第一義的條件の今日斯く壞類したる現状に於ては、何等宗教心意的にその尊信を繼ぐに足るべき權威ある物では決して無い譯である。

次にラム尊信は如何と云ふに、之れも又た將來に於て回教徒の現世的尊

信對象の歸一點となるべく斯く好望なるものではないらしくある。即ち之も又た其過去に於ける尊信の要素たりしもの、如きは、矢張り盛大なる土耳其帝國の國家的勢威を背景として繋がれて居たからである。然し之は彼のカリフ尊信の要件の如く全然繋つて土耳其の國家的勢威に基脚したるのではなく、シャフキ派の回教々義解釋の少くとも多少の根柢ある宗教意識に基脚して居る以上、彼れの如く斯く容易にその生命を沒了さるべきではないが、既に今日現世的勢威の背景は失はれた以上、其宗教意識による尊信も或はシャフキ派の主張するシャリフ尊信の前に叩頭すべき運命を有つものではあるまいかと思はれるのである。一體、回教々義を解釋するに當つてシャフキの主義とする所は近代の法理に則するもので、其政教二權の截然たる分離、換言すれば回教々權と回教國政權との併立を主唱するもので、

之れは嚴正なる回教々義探究の結果は異端的解釋であるとされるべきものである。元來、回教々義には確然たる國家意識を排除して居る、従つて斯く政教二權が截然と區別され併立すべき性質のものでなく、之れを一言にして云へば政權は當然教權の一部分として教權中に含まれてあるべきであつて、更に之れを極言すれば回教々國將た回教國家にありては教權の外に政權など稱すべきものゝ所在しやうがない筈なのである。従つて之れを演釋して現世的尊信對象の歸一を論斷せんとすれば、その歸一點はラムのそれにあらずして寧ろシャリフのそれにあるのが至當の様である。然し夫れは單に理論であり、問題は深刻なる實際である。殊に現今、ラム尊信は甚だしく政治化されて汎回教主義者の主張する所である。即ち今日の國際生活に於て寧ろ空しき教權を空しくラムの尊信に晦迷隱匿し去つて、回教徒

の政治的自尊を國際生活の裡に確立せんとする汎回教主義にあつては、現世的尊信對象の所在は重要なる問題とはならないのである。之れが反つてラムの尊信存続上都合よき情勢を馴致する契機ではあるが、斯くせばラム尊信の教義上の精神は破壊されて仕舞ふ危険のあるとは勿論で、之は迷信的なる迄に信仰把持に熱烈なる大數回教徒の早晩覺曉して、近く事件を更に混迷せしむる因子を蒔いて置いてあると同様である。

上述二者に比してシャリフの尊信はその成立條件に於て既に遙かに合理的なものがあつて、今日の狀勢に於て遙かに有利なるものがある様である。即ちその之れを主張する理論としては、シャリフ存立の精神を教祖マホメツドの没後アブベタルか教皇即位の精神即ち教祖の正統なる後繼者として回教成立の神聖なる目的即ち神意を遵奉することによつて地上に絶對の平

和を確立せんとする宗教的理想實現をその職分とするものであつて、且つ更にその傳統的宗教感情を強めんものとして現時のシャリフに、彼の教祖が以てモーゼに於けるアローンに比すべきものとなしたるアリーの混濁せられざる血統を引くキタダ家の家長を撰んだとは甚だ有力なとてある。之れは今次の世界大變革に於てその自主自治を認められ保證せられて、名實共にアラビヤ回教々團の主宰者となつて居るのである。一方、カッフ尊信が既に述べし如く昔の盛を失墜し、ラム尊信の亦た殆んど同一の運命に沈淪せる現状よりして、シャリフは以て世界二億二千萬の全回教徒の現世的尊信の對象として最も多く可能性を有するものと見做されるのである。

以上、五箇信條の第一なる天神アラーの信仰は、信仰心理の當然なる延長として教祖の尊信及び教祖後繼者の尊信を誘起し、一方に於て又た經典

の崇拜を派生したのであるが、更に今一つ是等教祖尊信と經典崇拜の二者相寄つて、スンナ即ち教祖の言行録も亦た教徒の尊崇すべきものなりと云ふ信條を馴生して居る。但し此スンナ尊重は一般的のものとは少し云ひ難いので、小亞細亞、埃及、スーダン其他阿弗利加の回教徒即ち所謂スンニ派回教徒間に主として信仰されて居る信條であつて、此派の尊重する六種の教祖言行録即ちスンナはその教學上實にコーランの補遺なりと做され、其經典の解釋に當つては常に傍證としてスンナを尊重して居る譯である。之が彼のヌビヤ地方の回教徒間に於けるが如く極端に主張された場合は、唯一至上神アラーの信仰を根柢とする回教は古代アラビヤの一英傑マホメッドを崇尊する一種の英雄崇拜と墮落する譯ではあるが、然し又、教相上教祖の人格中心とするものともなつて、宗教實踐の目的上、効果多き善方面

とも開展する事が出来る約束下にもある譯で、その是非の如きは今日吾人の問題として餘りに大した重要なるものではないし、且つ又た南洋の回教徒は孰れかと云ふと既に屢々述べた如くシャイ派回教に屬すべきものであり、加之、その教相は異端的に壞類して居る有様で、スンナの教ふる道徳上の徳目なり行爲に關しては全然無關心である有様であるから、之れに關してはより多くを述べる必要を認めないと思はれるのである。が、一例をだけ擧げて兩者教相の相違を窺ふの一資料とするならば、スンニ派回教徒間にあつては、山鳩を神聖視し之れを愛好し保護して、決して之れを捕へ傷つけるとをせない。之れは彼のマホメッドが、その一度起つて回教を宣布するや翕然として襲ひかゝつた偶像崇拜の徒の頑強なる迫害を受けて教勢中々に揚らず、遂に身は少時、偶像の徒の兇刃を避くべくメツカを遁走

せねばならない非運に會して、夜陰私かにメツカを去つてトール山中の一岩窟内に避難した時、遇々山鳩が彼の隠れたる岩窟の入口に數箇の卵を生み去つた。マホメッド追撃に急なる偶像の徒が彼れを捜ね索めて何處にも得ず、此に之の岩窟を探ぬるとなつた。然しその入口に生み放たれたる山鳩の可愛き卵を見るに及んで、彼等は山鳩が今しばかりに斯く卵を生める上はこの奥に人の匿れ在る理なしとして岩窟の搜索を中止し、教祖は爲めに危き迫害の毒刃を逃れ得たと云ふスンナの記述に因由するものであるが、南洋の回教徒に於ては此の如きは沒交渉の事件であつて、彼等は平氣で山鳩を捕へ油揚げにしてその美味に舌鼓を打つて居る有様である。

五箇信條の第二は一日五回以上の祈禱禮拜である。一體、回教に於ては此の祈禱禮拜の信條修行は勿論、他の三箇の信條なりその他一切の宗教的

修行は皆悉く清浄であらねばならぬと云ふとを根本条件とするもので、清浄ならざる者の如何なる善行も、それは面に信仰を装ふて内に神の神聖を汚瀆する偽善者の瀆神行爲に外ならぬ。

清浄及び汚穢に關する觀念

一切萬物を本質的に淨穢二物に確分する……人は本來清浄物なれど時間的に汚穢となる……汚穢化に二あり淨化法にも亦た二種ある……行爲の一切は心身清浄なるべきを根本要件とする……

回教の清浄及び汚穢に關する觀念は實に回教修行の根本をなすものである。一體、回教々義は宇宙間一切のありとしあるものを、清浄なるものと不浄なるものとに、截然と區別して居る。交媾、手姪、鶏姦、夢精、その他一切の生殖的將た性慾的行爲は勿論、性慾的衝動をさへ不浄なるもの、第一なるものとなし、次では一切の生物の死屍、血、膿、産褥惡露、嘔吐

物、精液、糞尿、洩淚、その他の排泄物、それから人間の飲食料となり得ない物及び酒の如く人間を酩酊せしむるもの等をも又た不浄なるもの、甚だしきものとして居るのである。而して是等不浄なるものは、神が之れを清浄ならしむる以外、如何なる人爲の手段方法を以てしても決して淨化し得ないことと信ぜられて居るのであつて、喩へば酒は本來不浄物ではあるが神意によつて、之れを科學的に云へば自然酸酵をして、酢となつた場合は清浄なるものとなつたと做されると云ふ譯合である。

人は本質的には清浄なるものであるとされて居るのであるが、不浄なるものに接近し將た接觸すると及び不浄なるとを行ふとによつて時間的に不浄なるものとなる。その不浄となる原因に輕重二様がある。即ち一つはハダアと云ふて軽い不浄化である。夫婦或は婚約ある異性以外の異性の膚に

觸れた場合、生殖器に觸れた場合、脱糞及び排尿或は嘔吐その他流涕等身體の排泄物を分泌した場合、卒倒、癲癇等によつて一時的に失神した場合、死屍に近づいた場合、送葬した場合等は皆これ輕き不淨となつた譯で、是等の輕き不淨中の者は禮拜堂に入ると、祈禱禮拜及びコーランに手を觸れ口に教義を語るとを忌まねばならないのであるが、是等の輕き不淨化はワヅ即ち輕き清淨法を行ふとによつて不淨を祓ひ、依然たる清淨の本質に復するとが出来ることになつて居るのである。ワヅ即ち輕き淨化法は、先づ不淨を救穢せんとする願念を起して、最初に清水を以て顔面を洗ひ次いで肘まで兩手を滌ひ清めて滯手をそのまま、頭上に扞げた後、最後に兩踵を清水中に互に磨り合はせて洗ふので、之れを行へばハダアの不淨は後痕もなく淨穢されて仕舞ふと云ふ譯である。今一つの不淨化はナガス即ち重き不淨

化であつて、これは生殖行爲をやつた時、性慾的の諸行爲をした時、それから婦人としては月經、分娩、産褥惡露等のあつた時に不淨化されるので、この重き不淨にある者は一切の宗教上の諸行爲を禁忌されるのであるが、之れも又た、重き淨化法即ちゴスルの法を行へば人間古來の清淨に取り得ることになつてゐるのである。そのゴスルの清淨法と云ふのは、先づ不淨を穢はんと願念する確固たる決心に發して清水を以て五體を洗滌し、靜かに神の聖明を默念することによつて神の齋戒をやる方法で、此の方法は人の健康上將た場所の地理的關係上、清水を以て爲し得ない状態にある場合は清淨なる砂を以て水に代用して宜敷いと云ふことになつて居て、この場合は即ち、兩手に淨砂を掴んで宛も水を被るが如くに頭上からあびるのである。又た、人は死ぬと云ふことと重き不淨を蒙ることになつて居るので

あるから、死者の近親者は是非ともに死者に對して重き淨化法即ちイスルをその屍體に施行してやらねば、その死者は所謂成佛すべく死して行くべき場所へ行けぬと云ふ憐むべき境遇に追逐されねばならぬことになるのである。

是等は我が古來の習俗たる神ながらの道に教へられた清淨嫌穢の俗に大體に於て相似たものであるが、回教修行の精神的なる以上に外制的なる特異性は、單に上述せる二つの淨化法の實行のみを以て足らずとして、頭髮を櫛り鬚髯を剃り腋毛を抜き去り爪を剪り等することは先づ普通事とするにしても、男女共その陰皮の一部を截除するカータム即ち割禮或は切禮の方法をさへ重大なる清淨化手段として實行して居る有様である。

こゝに一つ一寸面白いことは、南洋の回教徒は何等回教々義に倚るにあ

らずして、彼等の古來の思想から左手を汚れたるもの、右手を清淨なるものとする觀念を可成り深く固く有つて居ることである。従つて彼等は不淨なる行爲は一切左手で處理して決して斯る場合に右手を使用せない。て左利きの者などは悪魔の化身なるかの如く嫌忌されて居るので、左利きの人には差し詰め南洋回教徒と接觸する場合、その第一印象に於て非常な不利を覺悟してかゝらねばならぬ譯である。

### 新 禮 拜

少くも一日五回一定の基本條件と順序と時間を確守してせねばならぬ……金曜日の正午は最も莊嚴に祈禱禮拜する……何の爲めに祈禱するのか理論と實際に甚だしき迷ひがある……男尊女卑は本質的なるかの如くに説示されてるが母系主義的に發達した南洋人の家庭では必ずしも然らず……加持祈禱魔法禁厭は教義に戻るものであるが南洋では盛んである……

兎に角に回教の修行は上來略述した清淨觀念に基脚して行爲されるのであつて、その五箇信條の第二たる祈禱禮拜の修行は、特に明確なるこの意識の下に嚴肅に勤行されねばならぬのである。

素と回教は淨祖開教の當初に於て既に一切の偶像を否定し、既成偶像破壊をその特異なる教相の一つとしたものであり、従つて爾後、今日に到るまで尙ほこれを固持して居て、その教徒が常住禮拜し祈禱すべき天神アラは偶像に將た繪畫に具像することは勿論、その他の如何なる方便を以てしても之れを具像することは絶対に瀆神行爲であるとして否定されて居るのである。が然し、偶像その他の具像手段を否定しては、其の信仰の對象即ちアラは得て人間の注意外に閑却され易いものであるからに、回教にあつては此の缺を補ふべく殊更に祈禱禮拜の度数を寧ろ煩はしき迄、度多

く要請して不斷に神を思念することによつて神の實在を的確に記憶し續けしめんと用意して居る譯で、實に回教にあつてはこの修行は他の幾多の修行中最も重大なるものとされて居るのである。その經典コーランは教徒に向つて一日五回以上の祈禱禮拜を要求して、其の最少限たる五度の祈禱禮拜の時刻を明示して、早朝日出前と、太陽が西に傾き初めたる正午過ぎと、日の將に没せんとする少し前と、日没後所謂黄昏れ時と、夜初更の頃との五時刻としてある。各祈禱禮拜も一定の基本條件と順序を嚴格に遵奉するにあらざれば、常に祈禱そのものゝ効果を損するのみならず、反つて瀆神の最大罪惡を犯すことゝなると教えられて居るのである。

而してその祈禱禮拜の修行をして有効ならしむべき條件とは、成年に達したる回教徒であつて、健全なる精神状態の下にあつて、不淨ならざるも



のであらねばならぬので、次いで時刻と、禮拜の方向即ちキブラと稱してメッカの方角と、動行の順序を嚴格に守り、且つ服装は清淨質素なるものでなからねばならぬと規定するのであり、又たその動行の順序は、先づ第一番に祈禱せねばならぬと云ふ崇高なる意志を起して天神アラ一の唯一至上なる偉大神格を思念し、次いで聖地メッカの方向即ち正しきケブラに向つて直立してコーランの第一章を朗唱して、双手が膝に届くまで體を屈めて敬禮し、靜かに頭を舉げて安立して『神は至上なり、神は至上なり、神は至上なり、神の唯一なることを信ず、マホメツドの神の使者なることを信ず、祈禱せん哉、祈禱せん哉、禮拜せん哉、神は至上なり、神は至上なり、神の外に神あることなし』と聲朗かに唱題して跪坐し、跪坐して額の地に着

くまで敬虔に再三體を屈めて禮拜し、徐ろに頭を上げて豫言者に祈禱の文言を唱へ、頭を左右に向けて『平和と神寵と汝等の上にあれ』と唱へつゝ敬禮して終るので、之れは各人任意に各自の室内に、或は路傍に、樹下に石上に、或は船車の中等、場所の如何を問はず、苟くも回教徒たるものはその祈禱の時刻となれば身は旅行中のものであらうが、兵馬劍戟の戦場にあらうが、必ず動行せねばならぬ重大なる修行である。篤く病んで四肢の自由を缺いだ者と雖も尙ほ心中にメッカの方向を思念して嚴かに黙禱を捧げねばならぬのであるが、今日、南洋に於てその教徒がこの修行を勤行するは、彼の中央亞細亞將た小亞細亞地方を旅行したる旅行者の手記に見るが如く嚴格に遵奉されて居るかと云ふと、南洋の回教徒間に於ては可成りに怠られて居て、特別に敬虔なる回教徒なりと稱せらるゝ者の外、大部分

は斯く嚴格に且つ敬虔に修行しては居ない様である。が、彼等の聖日即ち金曜日の正午過ぎに於ける回教寺院即ちメシジの殿堂裡に於ける祈禱禮拜の儀式は、這がに嚴肅に敬虔に修行されて居るのであつて、金曜日の正午ともなれば、太鼓は終々と鳴つて祈禱の將に初まらんとすることを一村の人々に傳へると、一村の民は疾病にして外出不可能なる者を除いて、苟くも自由の公民ともあれば三々五々打連れ立つてメシジに集まり、堂前の清淨池にワツの清淨法を修して殿堂裡に進み、正確にケブラを指示するメラーブに面して着坐し、肅然として天神の偉大なることを思念しつゝ祈禱の初まるを待つ、祈禱の主導者はイマム即ち回教の僧侶であつて、祈禱は既に述べた普通の場合に於けると同一の次第で、嚴肅に莊嚴に且つ敬虔に勤行され、更に祈禱僧はメラーブの傍に一段高く設らへた壇上に上つて神を讚美

するの說教をする、その嚴肅なる堂裡の光景と、祈禱僧の主唱に同じて異口同音に朗唱する『神は至上なり』云々の祈禱文の七音に富んだアラビヤ語の唱題は、妙に聖に貴く響いて吾々異教の者をしてさへ之れを見、之れを聞くに一種云ふべからざる宗教的讚美の念を起さしめるに充分である。然らば斯く彼等は嚴肅に敬虔に祈禱するが、そも又た何を祈り何を求むるのであるかと問ふならば、之れに關しては彼等は明確な意識を有たない。理論としては、現世の過去現在に於ける神の加護に對する感謝を表明し、現世未來に於ける神の冥護を祈求するものであるべきであるが、所謂彼の敎と經典とによつて多く軍陣の間に宣布されたる回教の天神は、甚だしく其の嚴峻なる神威の一面のみが殊更に力説されてゐる弊として、その教徒をして神の普遍なる汎愛の温かき一面を感悟せしめてゐないものか

ら、その當然、現苦消滅壽福無量の祈願たるべき祈禱をして、自ら神人相通ずるの愛の真情を缺いて、教徒をして災禍に遇ふて神に謝罪し、喜福に悦んで神に感謝すること、下臣の専制君主に對するが如き感情を生ぜしめて居るので、加之、其の教習は婦女子の公然なる祈禱を拒否して、聖日に於けるメシジの公式祈禱は勿論、各自々宅に於ける平日の祈禱にも婦女子は男子と席を同じうしてと云ふよりも、寧ろ婦女子は神に祈禱する教徒としての權利を認められてゐない有様であつて、婦女子にして神を信仰すること敬虔なる者の祈禱禮拜は、私かに自己居室内にて修行するか或は未だ男子の集まらざるに先じて寺院の殿前に惶惶として而かも黙禱せねばならない仕儀なので、回教徒の婦女子は確乎たる獨立自由の人格でないといふ時代後れの偏狹なる解釋の下に、完全なる回教徒としての特權を否認せら

れ、不用意の裡に神より離されて居る次第である。

一體、回教に於て婦女子の位置は彼の經典コーランの所謂「男は常に女より勝れたり。神は實に斯く造り給ひしなり」と云ふので最も頑迷且つ偏狹なる男尊女卑の觀念の下に、婦女子の人としての權利は殆ど承認されて居ない。唯僅かに婦女子の一度嫁して人の妻となるに及んで社會的に一箇の人格として認められるのであるが、その尊卑の如きは依然として男子の遙かなる下にあるもので、上述するが如く回教徒として當然なる聖務である祈禱禮拜の修行の如きも、公には婦女子は完全なる獨立人格ならざるの故を以て、その勤行を否認せられてゐるし、次に述べんとする聖地巡禮の修行の如きも確實なる保護監督者に率らるゝにあらざればその修行を禁壓されて居る様な譯で、之れは彼の小乗なる佛教思想に禍せられて女は業深き者

なるが故にと云ふ理由から、我が徳川時代の婦女子が虐遇されて居たとその理由こそ異へ同一の境遇に沈湎して居るのが今日の回教婦人の現状である。が、元來南洋の土人の家族制度なるものは母系主義であつた、従つて母權は彼等の社會生活上常に父權の上にあつた關係上、後年回教の宣布せられて今日彼等は相率ゐて回教徒となり、その教習は甚だしく彼等の舊慣に裏切つて女權を否定するの結果を將來したが、之れと彼れと相矛盾し撞着するの悲劇は彼等性來の氣紛れの樂天氣分に殺了されて、南洋の婦女子は宗教生活に於て男子と同等の人格を否認されては居るが、その家庭生活に於ては依然として古來の女權を肯定されて居て毫も撞着する無く何等の不都合を生じて居ない。

遮莫、祈禱禮拜に對する彼等の宗教的經驗は斯く枯淡なるものである。

而して彼等とて弱き人の子である、嫌苦好樂は偽らざる本然の性である。自己の力の及ばざる以上を神或は超人間の何者かの力の援助によつて求むる念は、彼等が科學的に文化の度が低い丈けに他の文明人より以上に熾烈なるものがある。於ては、彼等の間にはその回教々義と全然相容れざる迷信的なる加持祈禱の修法を發達せしめて、神秘的なる手段の下に奇蹟を僥倖する様にならしめた。即ちラチブとかジクル或はスルと云ふ一種の魔術的祈禱法が彼等の間では一種のイルム即ち學術として發達し、回教僧侶は是等の加持修法の靈驗の如何に依つてその尊否を争はれる様になつた。此の教風は元來怠惰な南洋回教徒間に於て特に尊重せられて居ることは自ら明かなるものがあるので、種々奇怪な呪文即ちヒクマと共に回教々義を怪奇なる迷信と化せしめたかの觀をなし、一方パワン即ち巫女の如き特種な

る加持祈禱を職業とする階級者を生ぜしめて彼等南洋回教徒は唯一至上神アラーを離れて斯種の加持祈禱の權威を尊信して一も加持二も祈禱と云つた有様である。之れを嚴正に判断すれば、斯種の加持祈禱の如きは魔術と共に教祖開教の當時に於て既に嚴かに禁壓せし所のもの、正信なる回教徒としては是等の加持祈禱の存在をさへ許すべきではない筈であるが、彼等氣紛れにして異端的なる南洋の回教徒は毎に彼等に不都合な教義には強いて無關心を装ふて澄まして居るのである。

### 回歴第九月三十日間の齋食

齋食の修行は甚だ至難なるが如くで實際は案外なものである……南洋回教徒の齋食修行は百害ありて一利なし……他の月の任意の齋食は望まじきことか……

五箇信條の第三はラマザン月で、回歴第九月三十日間の齋食即ちフェ

ツルである。之れは思念を神以外一切の俗事俗物より斷つて、只管に俗心を法心に訓練し、肉身を貪慾の惡漬より清淨にすることを目的とする修行である。従つて此の修行期間は一切の性慾的行爲及び死の穢れより厭離し、飲食を斷ち、吸入灌注其他如何なる方法に依つても外物を體内に攝り容るゝことは勿論、唾液を呑み近むこと、さては呼吸して外氣を吸ひ込むことをさへ禁厭することを理想的な修行とする位に、戒慎翼々として一切の外物を體内に攝容せざるやうにし、異性との交媾などは勿論のこと抱擁、接吻、握手、さては言葉を交はすことすら斷禁せられるのであるから、斯る殆んど枯木死灰的の者にあらざるよりは到底不可能なるかの如き齋食の修行が、而も三十日間に涉つて動行されて居ると云ふとは奇蹟的に感ぜられるのである。が、事實を詳細にすれば、之れは案外なる寧ろ嗤ふ

べく憐むべく將た唾棄すべき欺瞞的行爲であるので、即ち此の一見至難不可能事なるべき齋食の修行は、日出より日没迄即ち日中のみ勤行されるべきものなりと云ふので、日の一度西山に没して夜の帷の下さるれば齋食の時刻は中絶した譯で彼等は自由に飲食するとは勿論、配遇者と交樂することも決して罪惡とはならないとされてゐる次第であるから、之は齋食修行者にとつて特別に忍苦を要する苦行ではあり得ない。且つ又た回教々義は齋食の修行を要制するに當つても特に合理的な教義を主張して居るもので即ち疾病ある者、妊娠中の婦女、哺乳を要する嬰兒ある母、旅行中の者は必ずしも齋食するを要せざるものなりと除外例を認めて居り、尙ほ自己の業務上の事情止むを得ざる者も亦た身分相應の施與をしさへすれば全々齋食をなさず、或は其の期間を必要なる程度に短縮しても構はぬと云ふとにな

つて居るのであるから、此の修行の如きは第一に廢棄して毫も瀆神の罪惡を犯すものではなく、寧ろ現代的に一般回教徒の文化生活を助長すべき結果を齎すべきものと思はれるのであるが、彼等の因循なるは斷乎として之れを斷廢し得ずして、反つて偽善的に欺瞞的に之れを修行して不智不識の裡に彼等の最も畏るゝ瀆神の大罪業を積んで居る次第である。殊に南洋の回教徒間にありて齋食の修行は數害あつて一利だになきものであると謂へる。彼等は此の齋食期間を遊戯半分に齋食しつゝ、尙ほ晝間斷食修行による體力の減少を口實として自己の業務を怠る、従つてその一ヶ月間は他の月に比して自己の収入の減少せるにも關らず、齋食明けの日即ち回曆第十月の一日に當るハリ、ラヤ、ブアサの祭日を盛大にする爲めに、身分相應の支出を敢てし、爲めに往々にして負債山積して豫期せざる不道德行爲

を仕出來かすといふなつて、彼等の生活の幸福を不用意の裡に破壊し、引いては地方の平和と經濟的平衡とを攘亂する結果を致すと云つた有様である。實際、南洋の回教徒が回曆シャリルの朔即ち齋食明けの當日の町祭り騒ぎは盛大なもので、互に盛装して大いに親戚故舊を招じ合つて盛んに飲み且つ食ひ燕飲數日に涉ると云ふ鹽梅で、之れを見聞する異教徒をして誤つてマレーの正月と呼び做はせてゐる位い盛んなものである。而してこの盛大なるハリ、ラヤ、ブアサの觀樂の後に嘗むべき彼等の苦痛は彼等の經濟的破滅と物質的缺亡である。

兎に角に既に屢々云ふが如く、南洋の回教徒は概してその教理に對する精神的理解などは皆無と云つてよい有様なのであるから、單に形式的で加之も有害無益な修行は廢れんとを望むべきで、斯かる聖務としての齋食も

寧ろ廢れて之れに代はるに彼のスンニ派教徒の特に敬虔なるがラマザーンRamazanの齋食以外に任意の修行として主張し勤行するが如く、モハラムMoharam即ち回曆第一月、ラジエブRajab即ち第七月、ヅルカーダZulqada即ち第十一月、ヅルハジャZulhija即ち第十二月の四ヶ月中の任意の日一日の嚴肅なる齋食を勸奨せんとは特に望まじきとであると思はれる。スンニ派に於ける此の教義はマホメツドの言として『神聖なる月の一日の齋食は他の月の三十ヶ日の齋食に優る』とソナSonaに記されてあるに基くもので、その以て神聖なる月と云ふは上述の四ヶ月で、就中アシュラAshura即ち第一月の十日及びテスリTesri即ち第七月の十日の二日は任意的齋食の佳辰とされてゐるのである。

## メツカ巡禮

全回教徒の等しく最重要視するもので南洋回教徒は利の意味から殊更に重要視す

る……回教徒の精神的鼓舞であり願結を強にする上に効果がある……南洋植民地政府にとつては数々害あつて一利もない重大問題である……南領東印度は之れによつて年々五百萬の正貨と八十萬人以上の勞力を失ひつゝある……

次はハジ、メッカ即ちメッカ巡禮の修行である。メッカは云ふ迄もなく今日に存續せるアラビヤの古代都市の一つで、回教々祖マホメツドの生地と云ふよりも、唯一天神の神殿カーバのあるとに依つて、世界二億二千萬の回教徒の等しく神聖最第一とする所である。經典コーランの教示する所によれば、メッカ巡禮を修行せざりし回教徒の死は猶太教徒將た基督教徒の死と毫も撰ぶ所なく彼等は等しく地獄に墮つべきものであると云ふので、回教徒によつて此の修行は實に後生善處の允可であり、成佛の記籍である譯で、従つてメッカ巡禮は回教徒男子の一生中是非一度は修行せねばならぬものであり、且つは彼等が現世に於ける理想の第一なるものとして

熱望する所である。殊に南洋回教徒間に於ては、メッカ巡禮を修して歸來した者をハジ即ち州禮を修した人を謂する一種の尊稱を冠して呼び、宗教生活に於ては勿論、一切の世間的生活に於ても先覺者として崇敬する俗が盛んな所から、本信條の修行は殊に重要なる意義を有す、彼等は本義的教義に衝動して巡禮するよりも、寧ろ歸來ハジを號して郷黨間に重きをなさんとする功利的感情に嗾られて爲すの風が著しい。従つて動機の卑劣は勢ひ目的達成に手段を擇ばなくならしめて、爲めに罪を犯して迄、之れを爲さんとする者をさへ少からず出すと云ふ工合で、之れは餘り感心すべき習俗でなくなつて仕舞つて居る。

遮莫、メッカ巡禮の修行は回曆第十二月即ちヅルハジヤの初め十日間に修行されるべきで、巡禮者は遅くも第十一月の末日までに聖地メッカの郊



外に到着して居ねばならない。各地の巡禮者は各自最寄り／＼に團體をなして然るべきハジ即ち嘗て巡禮した経験者を先達と仰いで、アフリカ、トルコ、シリヤ、メソポタミヤ、ベルシヤ、中央亞細亞、カザン、コーカサス等の巡禮者は主として陸路によりシリヤより鐵道の便を藉つてメツカに入り、印度、南洋諸島の巡禮者は海路によつてメツカの海港ジツタに上陸して、之れ又た鐵路メツカに入るのである。南洋回教徒間にては此の巡禮の世話周旋はハジの或る者によつて獨立した一職業となつて居て、夫れ等のハジは巡禮周旋業者として新嘉坡、バタビヤ、スーラバヤ等に事務所を有つて殖民地政府官許の下に營業して居るので、南洋回教徒は巡禮の費用さへあれば他の地方の回教徒に比して非常に便利に且つ容易に巡禮し得る便利を享有して居る譯である。

回曆第十二月に先んじてメツカ郊外に集つた各地の巡禮者は先づゴスル即ち重き清淨法を行ふて、心身双つながらを清淨にしてイーラムと云ふ巡禮衣を纏ふ。イーラムは二枚の大巾毛織物で、その一枚を腰に一枚を肩に纏ふので足には草履を穿くが頭には何物をも纏はず被らずに、靜肅に列をなして聖市メツカに繰り込むのである。この巡禮衣を纏へる間即ち巡禮修行期間の十日間、彼等巡禮者は香水その他化粧料を以て化粧することは勿論、髪を櫛り爪を剪り鬚を剃る等、容姿を粧ふとは禁ぜられ、一切の性慾的行爲は勿論、それ等を思念するをも嚴誡せられ、凡そ人生に有用なる動物或は植物を殺したり枯らしたりして害ふとも慎められるので、是等の禁戒を犯しての修行は實に其効果なきのみならず反つて瀆神の犯罪者となる譯である。斯くイーラムを纏つて當然、心身共に清淨無垢なるべき巡

禮者は各地方々々の團體毎に相携へて便宜の門からメシジ、アル、ハラム即ち神聖寺の境内に進んで、寺内の垢離井でワヅの清淨法を修して神聖門から聖區に入り、神殿カーバをその東南隅から初めて七度周ぐりつゝ一週りを終る毎に神聖の黒石を撫て、其の掌を接吻するのである。これ第一日の修行が終るので、巡禮者の各團體は各自所屬の特設控所に退いて懃ふた上、復た便宜のの門から神聖寺を出て去る。次の日からはサフワ、メルワ兩山の間、二哩餘の砂礫の道を七回往復する修行に就くのである。これは昔しハガルが其の兒イスマエルの爲めに水を求め歩いた苦行を偲ぶ爲めの修行で、従つて其の往復七回とも、巡禮者は或時は漫步し、或時は疾驅し或は後戻りし、徘徊し、低徊し、且つは立ち停まりなどして宛も人が何物か遺失せしを捜し索める様な風を爲すのである。此の馬鹿氣た修行後、巡

禮者は禪定觀念の三昧に入つて第八日の午前中にミナ即ち犠牲谷に集合し敬虔に經典を讀誦しつゝアラアの偉大なるを讚美しつゝ徹夜する。翌朝は晨の禮拜後、彼等巡禮者の集團は狂人の如く、一齊に喧號しつゝアラア山に突進し、その山上に跪坐して靜かに祈禱を擧げ神を默念し、夜に入つて山を下りモザリファの聖臺に參籠して、又々コーランを讀誦して夜を徹する。翌未明、マシエル、アル、ハラム即ち神聖碑に參拜して日の漸く出づる比、ミナの谷に歸着する。ミナの谷には豫め惡魔なりと假定せる三本の柱を立て、あつて、禮者は各々七箇の礫石を此の柱に投げつけるのである。これも又た昔しアブラハムが此處に惡魔に遇つた時、神の啓示するがまゝに礫を七箇擲げつけて惡魔を退治したと云ふ故事を繰り返すもので、此の修行後、巡禮達は各自その携へ來つた犠牲を適宜の石上に屠つて先づ

神に捧げ、集ひ寄る貧者乞丐達に頒ち施し、己れも啖ひ同行の友とも頒ち啖ひ合ふのである。犠牲は仔羊、牡山羊、牝牛將た牝駱駝等で、巡禮者はその各自の富に應じて斯等の犠牲を用意するのである。

斯くして彼等巡禮達は次に鬚を剃り爪を剪つて其の場にそれ等の鬚爪を焼き棄て、最後に再びカーバ神殿に参拜して茲に目出度十日間の巡禮修行を終はるのである。巡禮修了後の三日間は引續いて又たイド、アル、アダー即ち犠牲祭が修行されるので、彼等巡禮達は更に財力に應じて犠牲を屠り神に無事巡禮満願の感謝を捧げ、且つはメツカ市民に頒與して淹留十日の謝意を表す。と一方、市民側にありても種々馳走を設けて巡禮達の勞苦を犒ふので、此の三日間は随分と賑かな且つ歡喜に満ちた榮の日である。この犠牲祭の歡樂は曾にメツカ市のみならず、巡禮者各自の郷關にあ

りても親戚故舊は相寄つて巡禮者を祝福するの盛宴は張られるのであるがこれは南洋に於てはシリヤ、エヂプト地方のそれの如く盛大に歡喜なものてなくハリ、ラヤ、ハジ即ち巡禮祭日と稱して平常より稍々賑はしさを呈する位いのものである。

回教徒婦女子の巡禮修行は一般的には否定されて居るので、殊に未婚の婦女子の巡禮は絶対に拒否されて居る。それは彼のメツカ巡禮資格として認めらるゝ回教徒たること、成年者なること、自由民たること、精神健全なる者たること、生理的並に經濟的に能力ある者たること五つの多くに照して一般に婦女子は不満足なる點があるからと云ふに則するもので、婦女子は夫ある者にして少くも徳操上信用するに足るべき三人の婦人同伴者あるにあらざれば、此の資格を満足するものにあらざるとして巡禮は出来ない

ことになつてゐるのである。で、回教婦人の巡禮修行は殆んど皆無と謂ふべき程少數であり、殊に南洋回教徒婦人の如き、その教團的生活に於て没交渉であるものからメツカ巡禮などするものは文字通りに皆無である。

既に述べた如く、喩へ一般信教上、功利的感情に基づく等と云ふ不純な分子が混在して居るとしても南洋回教徒間に在りて聖地巡禮の信條が他の四箇の信條に比して特に重要視され、勤行されて居ることは事實であつて之れをシャリフ宮宰の年報に見るも、一千九百八年に於ける聖地巡禮者十萬八千餘人の内、蘭領印度よりせし者のみにて實に一萬七百二十九人と數へられて全體の一割弱を占めて居る。又た、爪哇に在る羅馬加特力教會の一宣教師の報告によると、一千九百一年以往二十九ヶ年間に於ける一ヶ年の平均巡禮者は蘭領東印度のみにて七千三百人て、その内、歸國せない者

X

Q

が毎回少なくとも二千人即ち約三割ある相である。是等の内には彼地に留まつて教義を研究する者もあるのであるが、その多くは氣候風土の異なる地に苦行するが爲めに圖らずも健康を害して遂に死亡する者であると云ふことである。而して是等巡禮者の費す所は、嘗て和蘭植民地官吏の巡禮周旋業者に就て調査せし所に徴すれば、概算一人當り四百四十盾と云ふことになつて居るが、之れには彼等巡禮者が聖地に於て屠る犠牲の代價は含まれて居ないので、夫れを算入すると少くとも一人當り五百盾を下らないものと推算されるので、差し當り蘭領東印度が毎年巡禮に依つて失はるゝ富は五百萬盾以上であると謂はれて居る。加之、蘭領東印度よりするメツカ巡禮は少くとも往復八十日の日子を要する、巡禮者の多くは勞動力充分な壯佼である、以て蘭領東印度の失ふ勞力は少くも八十萬人工である譯で、積

消兩極共にメッカ巡禮の蘭領東印度地方經濟に蒙らしむる損失は容易ならぬものである。更に尙ほ、メッカ巡禮と云ふ宗儀上の一事象の蘭領東印度の統治上に看過すべからざる危険性を帯びて居ると云ふことは、兩者相俟つて植民行政上の由々敷き問題となつて居るのである。

一體、メッカ巡禮の信條は回教々團にとつて實に都合の好い用意であると言ふべきで、之れは實に西半球の大部分に涉つて散在する一切の回教徒を結ぶ有力且つ有功な絆である。即ち、支那、南洋、印度、中央亞細亞、斯、小亞細亞、土耳其、埃及、その他中央阿非利加の僻落より集り寄る回教徒は、聖地巡禮によつて火の如き信仰を更にも強め、且つは回教々勢の偉大に刺激され鼓舞されて、牢乎たる信念と矜持とを確把し熱烈なる信仰を新にして各自の郷關に歸る、歸つて後は、實に吳下の舊阿蒙にあらずて

その異教徒に對するや、その壓迫すべきは壓迫し、すべからざるは反抗すると云つた工合で、彼等の宗教的熱情は、往々にして狂燥性を帯ぶるので、夫れ等を統治する異教徒爲政者は常に少からぬ面倒をみせられるのである。

されば蘭領東印度政府の如きは、斯く治下回教徒のメッカ巡禮によつて經濟的には年少くも五百萬盾の正貨流出を餘儀なくせられ、八十萬人工の勞力を減殺せられ、政治的には徒なる反抗心を激昂させられる許りて、弊害こそあれ一つの利する所さへ無いものなるからに、常に之れの禁止將た抑壓策に腐心つし、嘗て一度は斷乎たる手段に出でんとしたことさへあつたが、不幸にして激烈なる反抗に遇ふて、今日にては陰に制壓にあらゆる手段を盡しつゝ、陽には放任し默視せる状態である。

以上は據るべき数字的證據のあるまゝに主として蘭領東印度のそれのみを述べたのであるが、この弊害は獨り蘭領東印度のそれのみに止まるものには無いので、等しく英領南洋のそれに於ても孰れ劣らず有之のである、只、英領南洋に於ては數に於て蘭領のその約半分であり、一般に英領植民地政府當局が對土人政策に就ては放任を主義とせるものから、彼れの如く斯く重大視し勞心せない迄である。

ミンダナオ、スールーの回教徒間に於ては斯る事象は殆んどないので、従つてその統治者である菲律賓政府は幸に斯る煩雜に無關心なることを得て居るやうである。

上述するが如く、メッカ巡禮の信條の實行に伴隨する事象は、その教義的研究を外にしても尙ほ政治的に興味多き研究對象であるが、次に述べん

とする喜捨即ちサダカの信條は本質的に政治的色彩の濃厚なものであるに關らず案外に興味薄きものである。

### 喜 捨

同教々國財政政策の過誤はこの信條を有名無實のものとして仕舞つた……

即ちサダカは其の語「サダカ」が正義を意味するヘブライ語に發する如くこは正義の觀念に基いて任意に且つ身分相應に爲さるべき性質のものであるが、既に屢々述べし如く極端に外制的儀律主義なる回教の根本信條の一つとして宣布せられたる以上、勢ひ強制的意味を濃厚にして一種の宗教税様のものとなり、教祖在世の時代に於て既に教祖自身によりて喜捨は強制的に徵集されて居たのであつた。が當時にありては未だ教團に對する納租の意味はなくて、全然神に奉獻するの意味が顯著であつて、強要はさるゝ

もの、先づ一口に言へば淨財の勸進であつたのであるが、漸次、代を經るに従ひ、回教々團の確立するに従ふて、よし夫れは近世國家に於けるが如き法律上の義務なる租税ではないにしても、名を宗教上の義務に藉つて實際的には教團歳入の主なる目的物として徴收せらるゝこととなり、徴收法も亦た確立せられて、主として教徒の所有財産、營業利得、産業収益等を喜捨課徴の目的物と定め、その賦課率の如きも財産價格或は收得純益の二割五分に對して二割を徵すると云ふた工合で、又た一方、所有に歸して未だ十一ヶ月を經ざる財産、諸種の産業或は營業の資本、將た一定の額に達せざる僅少なる収益等に對しては喜捨を強要せない抔と云ふ規定も制定せられて、同一物に對する二重三重の賦課及び貧困者に對する苛斂を防止すべき考慮も用意され、可成りに進歩した近代的國家の租税と何等異なるなき

ものとして仕舞つたのである。

是等の喜捨は回教の所謂、神の財産と稱するものであつて教團の特別金庫に收納され、必要に應じて貧者即ちその收入が喜捨を賦課さるゝ最低額にさへ達せざる教徒、或は扶助なき在留外國人、行路病者等に轉施せられ或は神聖戰爭の從軍者、其の他、回教に功勞ありし士等に賞與せらるべきを原則としたのであつたが、後年、喜捨徴收權がイマム即ち僧侶の手を離れてサルタン即ち政權の主宰者の手に移るに及んで、且つは回教々團なり將た國家歳入の他の主要なるものが漸減し、果ては皆無となるに及んでは時に往々にして暴君の苛斂誅求となり、喜捨されたる財の用途は豪奢なる生活の費用に濫用されたりして、その弊竇の極まる所、遂に今日に於て喜捨は名實共に空しくなつて、往年、喜捨に依つて施されたる教團の事業は

國家の徵收する租税中よりワカフ即ち宗儀資金として、その一少部分を僧侶の手に頒與せらるゝと云ふ有様で、それも事實は云ふに足らぬ僅少額で僅かに僧侶自身の生活を保證するに足る位のもので、貧者、行路者等へ封施する杯と云ふことは到底不可能のこととなつたのである。

一體、回教々團がその成立の當初に於て教團の收入として撰んだものは二つであつた。即ち第一には征服せられたる異教徒或は回教々團の治下に在る異教徒より徵收する回教の所謂鹵獲品で、第二は教徒の任意應分の離出による喜捨である。前者は彼等の所謂、回教徒の財産と稱するものでその使途は主として回教々團の維持發展の諸費用に當てらるべきで、後者は神の財産と稱せらるゝものでその費途は既に述べしが如くであつた。こゝに今日その主要信條の一つたる喜捨をして空しきものと墮落せしめた禍因

が伏在するのである。彼等の理想に従へば最後は全世界を擧げて皆一樣に回教流布の國土と化し、全人類を擧げて皆一樣なる回教徒となるべきで、斯ればその理想の實現せられんに於ては當然、回教徒の財産としての教團の收入は皆無となる譯で、而も斯く回教々團の膨脹は益々教團の支出を増加すべき筈で、旁々この收入制度は、その理想の開展と反比例して存續を脅かされねばならない。又た、時に隆替あつて回教々勢は常に隆々たるべきことは保し難いことである以上、この制度による異教徒よりの收入は回教々義の衰微に正比例して窘迫されるが自明の理である。所詮、榮ゆるも衰ふるも此の制度の存在は常に脅かされて居る譯で、遂には今日の斯くなつたとは當然の結果であると謂ふべきである。要するに回教信條の主要なる五箇の一つなる喜捨の信條は、今日有名無實のものとなつて仕舞つて



南洋の回教徒の内などでは喜捨の信條の有無さへ知らぬ者も少なからぬ有様である。

以上、回教の重要なる五箇の信條を略述しつゝ、その教義の一端を述べ併せて南洋回教徒の現状を大略ながら述べた。次に些か回教儀律の一斑を述べて南洋回教徒が彼等の世間生活上、如何に回教儀律と交渉せるかを窺はねばならぬ必要があると思ふ。これ回教は極端なる儀律教であつて、その教徒の世間生活行爲の一切を神の名に於て儀制し、その實踐を神の威烈に依つて策勵するものであるが故である。

### 第三段

回教儀律は回教法規の原據で經典に原則するものである……經典解釋の權威に四大家があるが南洋のはシャフキのみに則る所が多い……

回教儀律は所謂マホメダンロー即ち回教法規の根源であつて、經典コーランの規定する所に原則するものである。即ち教祖マホメットが經典に教ゆる所を根本依據の原理として或は教祖の言行録たる六種のソナナを傍證とし、或は其の他、教徒民族間の習慣は參酌したりなどして、今日まで各地各様に大同小異なる數種のマホメダンローが行はれて居る次第であるが要するに孰れも經典を敷衍したもので、従つて是等は經典と殆んど同一の超物質的權威を以て遵奉され、小は彼等教徒が日常飲食の些事から、大は回教國家の内治外交の大事をまで規矩し準繩するものである。て、苟しくも回教徒と親和し彼等を誘掖せんとする者は大なり小なり回教儀律に相當の理解がなければ叶はぬ譯である。

如説、回教儀律は經典コーランの教ゆる所を敬虔に且つ忠實に實行する

ことを原則とするのであるが、如何に神聖無上なる神授の經典と雖ども文字は要するに單なる死物であつて、之れを生かすものは各地各時代の先覺であり智識であらねばならぬ。於是、コランの解釋に古來、四家の權威がある。即ちハニハとマレとシャフキとハンバルの四人であつて、今日實踐されて居る回教儀律は是等四家の解釋による其の孰れかに則れるものである。南洋に於ては地方毎に極く些細な相違があり、又た歴史的考察によつて其の孰れに則れるかと確證することは出來難いものであるが、大體に於てシャッフキの夫れに則るものゝ如く思爲されるのである。彼の馬來半島ペラ州に傳へられたウンダン、ウンダン、スピランプロ、スピラン即ち九十九箇條法規の如きは其の態裁内容共に明かに之を左證するもので、爪哇に傳はれるニチ、サストラ即ちニチ聖典の如きも夫れは印度教々典の如

き態裁に記述されては居るが、その内容にはシャッフキの回教法規を原則とするものを多量に發見することが出來るのである。

是等、纏つたる回教儀律の研究、將た詳説は吾人が回教徒と交渉するに當つて必要なるものであり又た一種の興味でもあることは勿論であるが、夫れは他日の機會と必要とに待つこととして、此處では其の極く大體を彼等回教徒の箇人生活に於て、家族生活に於て、社會生活に於て、國家將た教團生活に於ての四項に分けて略述するに止めて置き度い。先づ彼等回教徒がその箇人生活に於て遵守すべき戒律は次に述ぶる如きものである。

### 遵守すべき儀律

五箇信候の敬虔なる勤行……偶像迷信の排斥……偶像排斥は南洋人の聖像藝術の發達を阻礙した……豚肉その他の飯食に關するものは割合に嚴守されてゐる……射的的遊戯を

禁止される……

先づ回教徒が其個人生活に於て遵守すべき儀律はと謂へば、それは回教々義の根幹をなすもの即ちルクム、アル、イスラム即ち五箇信條を教徒各自が各々敬虔に勤行することを第一義として、次いで偶像及び迷信を排斥することである。偶像及び迷信を排斥し禁厭することは正信純一なる信仰を困迷せしめざらん爲めの用意であつて、教祖開教の當時は勿論、凡そ回教の宣布さるゝ處、其地古來の偶像は殘虐なるまで徹底的に破壊され、迷信は極端に排斥され嚴かに禁厭されたのであるが、南洋に於ては偶像建立の禁厭は勵行されて居るが、迷信の方は依然として彼等の精神生活を支配して居るやうである。其迷信が手段とする所の卜占、魔術等は或は寧ろアラ一の神意に依りアラ一の冥護に俟つて之れ有るかの如く思念され尊崇されて居

ると謂ふべき有様で、パワン即ち巫者が依然として一般の尊信を鍾めて居ることなどは兎も角、回教信仰の純正なるを宣布すべき回教布教師即ちクリバも僧侶即ちイマムも競ふてラチブとかジクル或はスル等と云ふ低級な卜占或は魔術修法を事として自家の神聖と尊嚴とを保持する所以と心得て居る位い回教儀律の本義に反馳して居る。而も夫れ等の魔術修法或は卜占は全然回教信仰に基脚せないもので、その或る種のものに至つては全く印度教の祈禱修法と同一なるものを只單に回教僧侶がアラ一の名に於て之を爲す瀆神行爲であるものも尠くないのである。但し、此種の矛盾は何れの時代、何れの地方にもあることとて、その是非善惡は吾人の争ふを要せざる所であるが、偶像建立の禁厭が勵行されたことは或る意味に於て彼等南洋士人の爲めに惜まれねばならないのである。即ち夫れは彼等の間に發達す

べき彫刻繪畫等の像形藝術の發達を阻礙するに強力なる因子となつたからである。今日、吾人は南洋土人の間に是等藝術の何物をも認むるとは出来ない。彼の爪哇のポロブドルを首めデーン臺地の處々に見る幾多の佛教或は印度教の貴重なる藝術の多くは當時既に斯種藝術的に優秀なりし印度移住民の手に成つたものとするも、ポナン即ち一種の銅鑄製作の手法、パテ即ち爪哇更紗の染法、チュタム或はスワサと稱する一種の七寶の手法、その他、クリス即ち劔の欄の彫刻等に見るも彼等の藝術的天賦は必ずしも貧弱なるものでないことが看取し得らるべきで、それ丈、その發達が五百年以前、回教流布の時代に止まつて爾後、云ふべき發達をなし得ない事實は確かに偶像拒否の回教々義か彼等を禍したものと惜まれるのである。

マレー人は豚肉を決して食はぬと云ふことは南洋を旅行した者の奇異に

感ずる所であり、南洋歸客の珍奇なる話柄の一つである。事實、南洋の回教徒は豚肉を食はない。昔に之れを食はぬのみならず、豚を以て瀆れたる嚴なるものとして敬虔なる者は、それに近づくことをさへ怖れ嫌ふ。之れは回教儀律が豚肉を食ふことを禁じて居るからのごとて、元來、回教儀律には彼の猶太教の夫れの如く雜瑣ではないが教徒の飲食に關して嚴たる禁戒がある。豚肉を食ふことは勿論、凡そ偶像へ奉るべく犠牲された一切の生肉、老衰或は疾病に因つて自ら斃死した獸類或は禽類の肉、互に闘ふて仆れた獸鳥の肉、一切生物の生血、それから偏狹なるものに至つては異教徒が調理したる一切の食物等は之れを攝取してはならぬことになつて居るのであるが、これも饑餓甚だしくして他に命を續ぐべき食物の無い場合は、その限りにあらずと明瞭に但書が附いて居るので、南洋に於ても割合に

嚴格に此の禁戒は遵守されて居るとは云ふものゝ、シンガポール、パタビヤ其の他の都市に住する所謂ハイカッタ部類に屬する者等は何等饑餓に頻せず且つ他に食物が幾許もあるに拘らず平氣で此の禁戒を破つて居る者も尠からずである様である。それから

酒と煙草は身體に害ありて、禁酒禁煙は今日健全なる社會の等しく唱導する所であるが、禁煙は兎も角もとして、飲酒の方は回教儀律の又た等しく禁戒する所であり、禁煙に代ふるに更に喫煙より害ある阿片及び含有物の喫食は之れ又た嚴戒する所である。その禁戒する所以は、酒及び一切の酒精含有飲料、阿片及び阿片含有物は、そを用ふる者として、その道德的良心を麻痺せしめ、宗教的義務を怠らしめて善良なる社會の風俗を紊し、喧嘩鬭争の危機を多からしめて社會の秩序平和を亂すと云ふにあるので、從

つて一面、斯る惡結果を起さない範圍でならば、それ等を用ふるとも看過されねばならぬと云ふ得手勝手な解釋が成り立つ譯で、南洋の回教徒間では彼等が性來、餘り酒豪でない儘に比較的、飲酒の戒は守られて居る様であるが、ベンと稱する一種の阿片含有錠劑は可成り廣く多數教徒の間に何等の宗教的良心の苛責なしに平氣で喫用されて居り、殊にベン喫用が印度に起源せる等の關係からか、嘗て印度文明に影響さるゝ所の多き爪哇に於ては殆んど普遍的に喫用されてゐる。然し、敬虔なる者も尠くない譯で、それ等の敬虔なる者は嚴正に持戒して酒をも阿片をも近づけないし、一度メッカ巡禮を修行してハヂと稱し自他共に郷黨の師表を以て任ずる者の如きに至つては自家生計の職業としてだに是等禁戒されたる飲食物を取扱ふことを爲なす。

次に飲酒の禁戒と精神を等しうして、結果を豫め測り知るべからざる僥倖を主とする遊戯、或は賭勝負の類は之れまた禁止されてゐる。たゞ遊戯が遊戯者の智的或は技術的終結によつて結果せらるべき種のものには許さるべきで、これとしても金銭其他の物品を賭けて行はるべきは禁止されてゐるのである。従て今日彼等の一般的遊戯とし云へば先づ、何物を賭けないチャトル即ち將棋、ビリヤード或は蹴球位である。次は順序として彼等の家族生活を律すべき儀律に就て述べる事にする。

### 家族生活と儀律

神意による夫婦關係の成立を以つて家庭生活は開始する……近親結婚及び異教徒との結婚は嚴禁せらる……南洋婦女子は絶對的に異教徒男子と結婚せない……一夫四妻及び蓄妾の容認は教祖の理想に反する……離婚及び再婚に關して周密なる儀律はあるが南洋では大して重要なものではない……離婚は生理的にも精神的にも未婚の舊態に復すると主義は南洋では彼等の結婚生活を紊亂した……家督及び遺産相続に關する儀律……

彼等の家族生活を律すべき儀律であるが、回教々義は神意に依る夫婦關係の成立を以て家庭の基礎となし、家族生活の發生とする。従つて婚姻及び離婚に關する儀律は以て彼等の家族生活を秩序あらしめ清福ならしむべき主要なるものであり、次いで相續に關する儀律と共に此の三者は彼等の家族生活を律すべき回教法規の主要部分を成すものである、

婚姻に關して回教法規の定むる所は、その婚姻年齢に就て何等の制約はないが生母は勿論、養母、義母、繼母等、苟くも母と稱さるゝ婦人との結婚、その父系たると母系たるとを問はず一般に伯叔母及び實姉妹、從姉妹姪との結婚、即ち近親結婚を禁止して居る。これは當に然るべきことであらうが、その異教徒との結婚を否定して居ることは些か回教一流の獨善的偏狹を發揮して居るかの觀がある。然し、南洋に於て此の儀律は餘り權威

あるものと認められて居ないので、生母、伯叔母、實姉妹等との結婚は遺がに之れを敢て爲す者は無い様であるが、其の他との近親結婚は地方によつては普通であり、異教徒婦女子を入れて妻とする如きも珍らしくない現象である。唯、南洋回教徒の婦女子にして異教徒男子の妻となるべきことは嚴かに制裁されて居て、このことだけは殆んど皆無と謂つべきである。彼地の田舎などに於ては其地在住の日本青年などで回教徒婦人を婚つて正式に結婚して居る者が往々ないではないが、それは異教徒青年が比喩へ一時の方便にもしろ兎に角、回教徒と化つた上で成立したことであつて、回教婦女子の異教徒に對する不婚の主張は頑迷なる迄に嚴戒されて居るのである。

茲に吾人が奇怪の念をなすものは、回教儀律が正式なる結婚に一夫四妻

を認容し、加之、尙ほ蓄妾を認容して居ることである。而も生兒に關して嫡庶の別を立て、居ないことは、實際的にも理論的にも一夫多妻を認容すると同一なるもので、奇矯なる理屈は兎もあれ、之れは一夫一妻否な一婦を主義とする今日の健全なる文明よりして痛切に指強さるべき野蠻であらねばならない。彼等の經典コーランには「汝等、一人二人三人四人まで妻を有つとを得、されど夫れ以上は能はず」と明かに一夫四妻を認容して居ることは事實である。然し又た一方に「男にして妻たる婦に同じ衣、同じ食を供し、偏らざる愛を等しくし得る者のみ同時に四人の妻を婚るとを得ん」と四妻認容に條件を附し、又た「汝等、四人の妻を等しく愛し、等しく遇し、等しく養ふとを得ざるならば、一人の妻に満足せざるべからず」と特に否定的語法を以て制限して居るので、之れに關する教祖マホメッド

の理想とする所は一夫一妻を主義とするものであつたに相違ないと思はれるのであるが、その今日に於て尙ほ一夫四妻、將た一夫多婦の野蠻なる陋習より進歩し得ざるは、主としてコーランの制定を以て神聖不可犯なりと極説力唱する教義の禍する所であると思爲されるのである。苟くも彼れマホメツドは一宗の教祖として、當時アラビヤの困迷せる人心を善易し、紊亂せる世態を善革すべき文明の指導者が、古來アラビヤの一夫多妻の陋習を僅かに四妻に制限するのみのことを以て終局の理想としやう筈がないのである。唯、之れは順序として易より難に輕より重に改革了せん程程に於ける一時的妥協に過ぎないものであり、その理想する一夫一妻主義の實現は後繼者に俟たんとしたるものであるに相違ないのである。その蓄妾の認容に關しても又た同様のことを言ひ得るのである。彼の汎回教主義者の

如きが茲に大いに目覺むる所があつて一夫一妻主義を高唱せるは回教道徳進歩上、當然なる道程である。

遮莫、今日このことの実際は、一部の富有なる者のみが尙ほ依然としてこの陋習に淫せる外、大多數者は近代に於ける資本主義的物質文明の開展に伴ふ自然の結果たる生活難に餘儀なくされて、一妻に甘んじて居る有様で、皮肉にも一夫一妻の理想は期せずして、意外の外因に強援されて實現して居る有様である。

兎に角、一夫四妻にもせよ回教儀律は神意による夫婦關係の成立を以て社會構成の人的基本とする以上、輕卒に斯る基本單位を破壊せんことは絶對に忌まるべきで、離婚は重大なる罪惡であらねばならぬ。然し、夫が暴虐にして妻を酷遇したり、資力乏しくして妻を扶養することが出来なかつ



たり、又た、妻が不貞腐れて夫の名譽を毀損したり、不作法であつて到底一家の主婦としての品格を保ち得ない場合、或は夫婦いづれかの一方が主として生殖を意味する夫婦の當然なる義務の實行を嫌忌し拒否した場合、又は孰れか、生理的に生殖不能者であつた場合等は、これ即ち神意に依らざる結婚であるとして、離婚は正當に行はれ得るのであり、配偶者の死別も又た正當なる離婚の理由である。この場合、離婚したる夫婦の間に満二歳に達せざる嬰兒があるか、或は女が妊娠せる場合は喩へ兩者の夫婦關係は絶えて居るとは云へ、女は依然として男の家庭に留まつて嬰兒が二歳に達する迄、又は胎兒を分娩して生兒が二歳に成長する迄、嬰兒哺乳の義務を果さねばならぬのである。但し女の遺留同居が家庭の和樂を破壊するものであるならば、男は女を別居せしめて哺乳義務の完行を要求するとも出

來るのであるが、その孰れにしても、女の哺乳義務遂行期間中に男の扶養の義務があるので、若し男にして此の義務を怠つた場合は當然、女は斷然たる離去を主張し且つ嬰兒哺育の義務をも放棄することが出来ることになつて居るのである。が、南洋に於ては彼等の家族制度が母系主義的に發達して居た等の關係で、兒は習慣的に母方に就くべきものゝ如く思爲されて居るので、離婚に依て生ずる斯る父母の生兒に關する義務の儀律は殆んど不必要である様である。

又た、離婚されたる女の再婚に關しても回教教儀律は、三度月經を見るまで再婚を禁止して居つて、合理的に離婚後に於ける生兒に關する紛擾を防止して居るのであるが、これも南洋に於ては、兒女は母方に就くの慣習が行はれてゐるものから、有つて無きが如きものである。

一般に前述するが如き正當なる離婚は、男女とも結婚以前の舊態に復するものなることを主義とするもので、従つて離れ去るべき者の所有物は悉く共に携へ去らるべきを原則とするのであるが、婦が不貞にして離婚された場合は其の所有物の一つをだも携へ去る譯にはいかない、同様に離婚の責任が夫にある場合、離婚されたる婦は離婚によつて蒙る損害の賠償、或は慰藉料を要求することが出来る譯である。但し、斯る場合、近來ちよいとある離婚されたる婦の貞操蹂躪など、云ふ云ひ方は立たぬ様である。それは即ち離婚を以て男女とも結婚以前の舊態に復するものなりとの主義は單に物質上のことにのみあらずして形而上のことに迄、權威ある主義で離婚は彼等を處女と做すものであるからである。この主義は會々南洋回教徒間に於ては不用意に悪用されて、彼等の離婚結婚を奔放ならしめ、随分

と露骨に夫婦關係を破壊し紊亂せしめて居る。

家督相續に關しては、原則として血縁者以外の者の相續を否定して居る位いで他に餘り大した儀律はない。て、各地方各様の慣習が自然的に其の地方々に慣用されて居る譯であるが、一般に相續の順位は男兒を第一位者として順次に女兒、兄弟姉妹甥姪に及ぶもので、兒に關しては嫡庶の差別を認めてないし、同位者の順位に就ても必ずしも長を先にし幼を後にすべきを主張してゐない。マレー人の家庭などにては寧ろ幼を先にし長を後にする慣習がある。

財産相續は之れに比して餘程重大視されて居るのであつて、原則として回教徒の財産相續は財産分配であり、分配を要求し得る者は血族者に限られるのである。その分配要求権の順位は妻及び子女を最優越權者として、

最優越権者の取得して尙ほ餘りありし場合に限つて、直系尊族より卑族に、傍系諸族にと各々順位を以て分配さるべきで、分配の額は常に男は女の二倍を取得すべきものとされてゐるのである。

家督相續及び財産相續とも家長或は財産所有者の死によつて發生するを原則とするもので、死者生前の遺言に依つては一般儀律に拘泥せずして行はれ得べきであるが、それも血族以外の者に指定することは相續儀律の原則に反するものとして、斯る遺言は効力なきものと認められて居るのである。但し、遺産相續將た分配の遺言が、遺産の全部或は一部分にしても之れを救恤事業等に投施すべく指定されてあつた場合、それは絶對の効力あるもので、これに對しては寡婦或は遺孤の最優越権も効力を失ふものとされて居る。一般に回教道德は遺産を諸種の社會公益事業に投ずることを望ま

しきこと、獎勵するので、従つて遺言の有無に拘らず遺産の救恤事業投施は、常に教義上の善行なるのみならず、儀律よりしても適法なる行爲と解釋されてゐるのである。

凡べて回教々義は回教徒の人格的平等觀に立脚して主張されて居るもので、従つて其の社會生活に關する儀律は殊更に教徒各人の平等無差別の主義に則して各人の自由意志尊重を原則として居る。その最も顯著に此の觀念の表はれて居るものは、奴隸禁止の儀律である。

### 社會生活に關する儀律

凡て儀律は教徒の人格的平等無差別を主義とする……奴隸は嚴禁されてゐるが實質的に奴隸であるものはある、之れは自由契約による正常なるものと做される……正當なる契約の誤た解釋は彼等の社會を生活紊亂する……姦通賣姪強姦等に関する嚴格な儀律も一般に性慾生活に放縱な南洋人には權威がない……治罪法は賠償即刑罪を主義とする……

植民政府は彼等の民事上のことに回教儀律を尊重するが刑事上は無視する……回教法規は行爲に對する責任能力を二つに區別する……回教徒は必ずしも排他的偏狹なものではない……南洋回教徒は毫も宗教的感情によつて異教徒と交渉せない……彼等は英人蘭人を教違し支那人アラビヤ人を嫌遠し印度人を輕蔑し日本人獨逸人に親近せんとする……

奴隸と云ふ言葉は今日に於ては既に業に遠き過去のものであつて、苟くも今日文明なる社會にありては實在せないものである筈であるが、事實は必ずしも然らずして、今日最高の文明を誇る社會に於てさへ尙ほ本質的には、往昔の奴隸と撰ばざるものが随分ある有様であるからに、半文明なる回教社會に於ては尙ほのことこの事實の存在は隨處に夥しくある。斯る事象の存在せることは、明かに回教々義に背戾し、儀律の嚴規を無視した瀆神的罪惡であらねばならぬ譯であるが、彼等は一向に罪惡と意識せざるの

みならず、儀律の解釋上、適法なる行爲の發動であると主張してゐるのである。それは彼等の所謂神意に據る契約即ち相互の完全なる自由意志に基いて爲されたる契約の履行が、恰かも往昔に於ける奴隸の如き關係を形成するにしても、これは決して教義に於て嚴戒されたる奴隸制度を復興せるものでないと言辯するのである。然らば神意に據る契約、回教儀律の適法なる契約とは如何なるものかと云ふに

凡べて回教儀律の以て適法なりとする契約は、回教徒の男兒二人を證人として、證人立會の上にて締結されたるものであれば、その契約が如何に契約當事者の一方に片務的なものなりとも、又た斯く契約するに到りたる裏面の事情の如何に拘らず、それは平等なる人格者の完全なる自由意志による行爲として正當なるものと認められて居るので、この見解は一切の回

教儀律を實際的に損毒する大いなる禍根であつて、これなるが故に彼の本來は嚴峻なる回教儀律の賣姪或は姦通行爲に對する制裁律にしても甚だしく弛緩して、忌彈すべき姪靡の風をして今日回教社會を墮落せしむるに至つたのである。

凡そ強姦なり賣姪、姦通等の行爲は何時如何なる場所に於て如何なる人物によつて遂行さるゝも、それは明かに不道徳行爲であり、赦すべからざる罪惡であることは謂ふまでもないこととて、回教儀律にありても又た嚴しく之れを禁止し、その犯す者を斷罪するや又た峻嚴である。マホメッド在世當時に於ては、姪を賣りたる婦女は未婚と既婚とを論ぜず一樣に糺斷して終身禁獄したものであつたらしく、その後代にありても、有夫の婦の賣姪は市に曝して行人をして石を擲たしめ、未婚の婦の犯行には笞百杖を加え

て一ヶ年間の追放に處分したものであつたらしいので、その斷罪の主義とする所は極端に見せしめ將た懲らしめを嚴かにして、斯る犯行の續出を防止するを第一義とするものである。尤も、賣姪の罪名を以て婦女を糺斷せん事は、決して輕々になさるべき事ではなくして、慎重なるが上にも慎重に爲ねばならぬものであるからに、回教儀律は之れを爲すに當つては必ず平素の操行方正なる回教徒男子四人の神聖なる證言あるべきを必要としてゐて、往々にして之れ有る婦女の無靠に泣くを防止してゐる。強姦の斷罪は又た之れに則るもので、受刑責任者が彼れにあつては婦女なるに反して之れにあつては男子である丈の違ひである。

姦通は其の罪、男女等しくさるべきもので加刑の精神は依然、賣姪、強姦のそれと等しく見せしめ或は懲しめを主義とするものであるが、處刑は

概して前二者に比して輕減されて居るやうであるし、それを斷罪するに當つては道がに著しく宗教らしい所がある。即ち配偶者の一方が他の一方の貞操を疑つて、その不貞を告訴した場合、比喩へ充分なる顯證を缺くとするも、四度告訴を繰り返して不貞を神に訴へ且つ五度その背倫に復讐せんことを誓約するならば、その告訴は有効であつて被告者は姦通犯人として斷罪されるのであるが、この場合、被告者が又た無實の告訴なる事及び不條理の復讐に對抗するの誓約を神前に爲す事を得るならば、晴天白日の身となる事が出来るのである。が夫婦の關係は犯行の有無に拘らず、その時を以て消滅するものとされてゐるのである。

概して南洋回教徒の性慾生活は放縱であつて、是等嚴正なる回教儀律の誠訓も、斷罪の脅威も彼等に對しては殆んど無能力なるかの觀がある。殊

に爪哇などに於ては隨時隨處に賣姪と姦通の罪惡は敢行されてゐて、彼のバンドン市の如きは姪風の最も逞い處であつて、その地方の土人なるスンダ美人なる語の如きは、直ちに移して姪賣婦の代名詞なるかの如く做されてゐる位である。

以上は主として回教の民事に關する儀律即ち回教民法とも云ふべきものに就て略述したのであるが、詐欺、竊盜、殺傷、殺人等即ち刑事に關する儀律即ち回教刑法とも云ふものに於ても大いに見るべく整備したるものがある。一般に回教の治罪儀律は『手を以て手に、眼を以て眼に償ふ』と云ふヘブライ主義を主義とするもので、至極峻嚴なるものである。従つて等額の賠償は一切の刑事上の犯罪糾斷に當つての原則である。て他人の片腕を傷害すれば己れの片腕を傷害されねばならない。然らずば傷害に依つて奪

て奪はれたる被害者の生理的不自由に相當する損害を賠償せねばならぬのであり、他人の所有物を盜奪した場合も、贓品を返却するか賠償すれば罪は償はれるのである。言ひ換えれば回教儀律の刑事斷罪の主義とする所は辨償即刑罰刑罰即辨償と云つた鹽梅で、萬事この主義を原則として定められてゐる譯であるが、南洋の如く異教徒の統治下にある回教徒にありては、當然その刑事上の犯行は該統治國の治罪法の適用を受くべきで、彼等の刑事犯行の處斷に對して斯る回教儀律の適用は主張され得べきものでない事は勿論の事であるからに、茲では斯種の回教儀律に就て多くを述ぶる必要もない譯である。實際、蘭領東印度にしても海峽植民地にしても又た馬來聯邦州その他の英國の保護國にしても、彼等回教徒間に發生したる民事上の裁斷に當つては、土會乃至は僧侶の宗教裁判を是認して、然るべき

制度を立て且つ機關を設けあるが、刑事上の裁判には等しく各母國法規に準據する植民地刑法を以てして、回教徒同士の犯行と雖も回教治罪法の適用を否定して居るのである。

茲で一言述べて置くべき事は、既に初めに述べた如く回教徒の社會生活を律すべき儀律は、各社會人の人格的平等無差別觀に基脚して制説されて居る事は事實であるが、その行爲に對する責任能力からして各社會人を二種に差別してゐる事である。即ち、これを完全責任者と半責任者とに差別してゐるので、一般に成年男子及び人の妻たる婦女子は完全責任人格であつて、然らざる者及び僕婢等の如く完全に獨立したる生計を營んで居ない者を半責任人格とするのである。従つて笞百杖に處罰せらるべき犯罪も人妻ならざる婦女乃至は小兒、僕婢等が犯したる場合の刑罰は當然、笞五十

杖に輕減されるべきものである。尙ほ婦女子が月經時中の責任能力も常態時に於ける夫れの半とされて居るので、月經時の婦女が生理的に殆んど不可抗なる衝動による犯罪處罰の準とされてゐるのである。

次に回教社會に於て異教徒は如何に見做され、如何に遇さるべきか、引いては南洋回教徒の異教徒觀は如何、これは重要なる問題である。

人は回教とし云へば他の諸宗教を目してアラアの爲め不俱戴天の仇敵視する極めて排他的偏狹なる見解を把持せるものなるかの如く速斷了し、從つて回教徒の異教徒を待つ又た斯くの如く頑迷偏狹なるもの、如く思爲して居るものが多い様であるが、事實は必ずしも然らずて、斯く偏狹なるものではない。元々、回教は彼の猶太教及び基督教と等しく太古には民族間に傳へられたるヤーベ神信仰の一分派なる以上、その宗派的根性將た宗教的

良心が猶基二教に對して自家をより尊くより優れたりと思爲し確信し又た主張する事は當然なる事で、彼の教祖マホメッド既に開教の當初に於て力めて猶基二教を攻撃し折伏し、這箇二教を掃滅して回教に統歸せん事を以て回教徒たるべき者の最大なる聖務なる事を宣説し、代々の後繼者も又た之れを高唱しつゝ、爲めに回教徒の異教殊に猶基二教に對する敵愾的感情は事々に時々高潮し、その極まる所は劍を執つて血河屍山の裡に相見ゆるに至つた事は過去に於て屢々なりし事實なるのみならず、今日に於ても尙ほ且つ往々にして之れ有る事實であるが、彼の「彼等、亦た機を得てアラアの道を聽く事を得る者なり」てふ祖教の觀念は又た今日依然として回教徒の心奥に存續してゐるもので、之れは一般回教徒の對異教徒觀の聖なる一面をなしてゐるものである。彼の教皇アリの如き「回教治下に在る異



教徒の生命と財産とは僧侶、教王と雖も故なくして之れを奪ふと能はざるものなり』と宣言して以て異教徒の安住を保證したる、又たバグダット教皇朝及びコルトバ教皇朝の孰れも異教徒保護局を特設して回教治下の異教徒保護に責して居た等の事實は、回教徒の異教徒、特に猶太教及び基督教徒を以て相容れざる仇敵なりとする彼等の偏狹を否定して、異教徒と雖も他日何等かの機縁を以て等しく回教徒となり得べき者なりと認容する彼等の寛大を表證するものである。是等の史實を知る回教徒が、今日基督教徒の治下にあつて昔日彼等の祖先が統治者として今日の統治者を寛容し保護に力めた所を、今日の統治者が彼等を遇する所に比較して、時に不平の泡を口角に飛ばし、不満の腕を扼して起つ事は、一概に被治下の統治者に對する僻見なりとして排すべきものには無い筈で、こは吾人第三者の公正なる批

評と解決とを必要とする所のものであらねばならぬのである。

却説、南洋の回教徒は相交渉する異教徒を如何に見て居るか。彼等は基督教徒の治下にある。その基督教徒と交渉ある事は勿論、印度教徒とも佛教徒、猶太教徒とも交渉してゐるし、又た少數なるながら原始的多神教徒とも交渉して居る。和蘭人及び英國人は政治的に彼等に優越せる基督教徒である。彼等は被治者として動々もすれば陥り易い僻見を以て、その専横に憤り特權を呪ひ驕豪を憎む事はあるが激發して大事に及ぶ程の深刻性を有つて居ないやうに思はれる。獨乙は等しく基督教徒ではあるが、好感を以て迎へられて居たやうであり、今次の世界的大戰亂の當面の責任者として世界人類一般の惡む所であり坏とは聞くが、南洋回教徒からは反つて一種の同情的感情を以て或は戦前よりも更に好感を以て迎へられて居るかの

如く思はれるのである。これは決して彼のウキルヘルム帝の回教徒懐柔策の成功によるものではなく、蘭人或は英人に對する嫌惡の心的苦痛を反撥的に獨人を好感する事によつて自慰せんとする心理的現象の發動であると云ふべきで、支那人を嫌惡する事の極端なる事も、その異教徒たるが故なるよりも彼等支那人の狡猾と生活諸様式の醜穢不潔なるによるものであるらしく、印度人に至つては嫌惡すると云はんより寧ろ彼等の輕誣する所て、そもその因する所は社會的地位に於て彼等は印度人に優るも劣る所なきが故である。我が日本人の如きは一般に好感を以て迎へられては居るが、それには餘り多くの尊敬の念を含有して居ないらしく、唯、親しむべき同格者と思爲しての事か、彼等一流の好奇心が比較的新しく交渉あるに至つた日本人に對して深き理解が無きまゝの發動か、その孰れにもよるものら

しく、決して強き理性によるの好感を拂つて居る譯ではないのである。彼をよく南洋歸客が語るが如く、南洋回教徒の我れを歓迎するてふ皮相なる事實を以て、何等か我れの矜るべきものなるかの如く且つは何等か我れの利すべき所をなし得べきものあるかの如く思念するは慎むべき事であらねばならぬ。原始的多神崇拜の徒に對する感情も既述せしが如くスマトラの中部バダン高原地方のバドリ回教徒の如きが僅かに回教徒としての特異性を發揮し、教義のまゝに行爲せる一部分的の例外を除けば、要するに彼等南洋回教徒の異教徒に對する感情は、宗教的感情とは殆んど沒交渉に現はれて居ると云ふべきである。彼の南洋在留のアラビヤ人の如きは、彼等の宗教的感情を以てすれば當然、親敬され歓迎さるべき筈であるに、事實はアラビヤ人の狡猾なる機敏は。甚だしく彼等の嫌憎する所となつて居る有様

である。

### 教團生活に関する儀律

割禮は重要なものではないが南洋回教徒は重要なものとする……神聖戦争は回教徒は明確なる国家觀念を缺く……布教を目的とする神聖戦争は今後容易にあり得ないが護法を目的とするものは容易に起り得る……神聖戦争の起否如何は「回教の地」の解釋如何による……各植民地政府の回教徒放任主義は護法神聖戦争防止に功があるが絕對的のものではない……汎回教主義は抽象的なる「回教の地」を政治的に解釋して全回教徒の一大帝國の創規を目的とする……今次大戦の結果土耳其帝國の努力の潰滅は汎回教運動を危険化した……南洋にも汎回教主義は徐々に浸潤しつつある……要するに南洋の回教徒は未だ異端的である……

佛教、基督教は勿論、苟くも進歩したる宗教々義の信徒に勸むる所の種々なる聖務も要約する所、自行と化他の二つに歸する。回教に於ても又た等しく然りて、回教徒たる者の當然なる聖務は、アラハを信仰する事に依

つて自己の品性を修養向上せしめ、自己及び自己の社會の福祉の増進と安寧の彌榮を祈禱する自行と、アラハの信仰に依つて得たる自己の安心立命の喜悅を等しく他人に勸傳せんとする化他との二つに外ならぬので、前者は即ち既に述べ來りたる諸儀律の遵奉實踐であつて、後者は次に述べんとする教團生活に関する儀律の努力邁踐である。而して夫れは彼の神聖戦争の名を以て人の注意を引く回教特異の布教宣傳を儀制するものである。然し、試みに南洋の回教徒に向つて汝等が回教徒として、その教團の一入として當に果さざるべからざる聖務の最第一なるものは何かと問ふならば、彼等は立ち處に、そは割禮を受くべき事なりと答ふるに相違ない、去つて更にビザンチン式の殿堂、嚴めしき回教寺院に白衣白帽の威儀端嚴せる回教僧侶に就て再び之れを糺す時、等しく割禮を以て回教々團生活者の

受くべく果すべき最第一の聖儀聖務なりとの答へを得るに相違なく。斯く南洋の回教徒は其の教義の理解に混迷し、實踐に誤錯して居るのである。

元來、割禮即ちカータムなるものは、回教の教ふる所によれば、そはアラビヤ人の祖なるアブラハムが清淨の天使ガブリエルより傳授されたるもので、その行はるべき目的は既に述べたゴスル及びワヅの二教法と等しく肉身を清淨にする爲めの一種の清淨法であり、宗教上の修行としては單に意味必ずしも重大ならざる助行の一つたるに止まるものに過ぎないのであると、誤つて南洋回教徒は之れを以て彼等が教團生活に入る最第一義と思爲し實行して居るので、末だ割禮を受けざる者は完全なる回教徒としての資格を認められず、正式なる經典の讀誦、天神の禮拜を慎められねばならないのである。て彼等は子弟の齡六歳乃至十五六歳の時季に於て必ずや強

制的に子弟をして割禮を受けさしめる。割禮は親族故舊を招じて盛大なる儀式の下に、受禮者を昂奮せしむべき喊聲と喧呼の裡に、回教僧侶が嚴かに執刀して陰莖包皮の一部を截斷するので、詰らぬと云ふよりも随分野蠻な儀式である。これを女兒に施す場合に於ては、内陰唇の一部を切斷することになるのであるが、一般に南洋回教徒は婦女子の信仰及び修行に對しては殆んど無關心であるが故に、従つて女子に此の受禮を強ふことは殆んど皆無のことであり、女子自身が自ら進んで此の受禮を要求するが如きは愈々以て絶無とも云ふべきである。又た男子なればこそ割禮は期せざる所に衛生上の利益を享くこともぞあれ、女子にあつては實以て堪え得べき所のもてなす。

兎に角に、南洋の回教徒は既に屢々云ふが如く信仰を持つに半ば遊戯的